
如月妖怪記 第一幕

閃理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

如月妖怪記 第一幕

【Nコード】

N5095K

【作者名】

閃理

【あらすじ】

如月閃は普通の高校生ではない。

妖怪×人間の物語

咲桜マーメイド

妖怪。

その存在は、遠い昔から語り継がれてきた存在。

妖怪と聞けば目玉親父や猫娘などを想像する俺だが、本物はそんなコミカルでアニメ染みた話では済まなかった。

本物の妖怪。

どこにでもいて――

どこにいるかわからない――

人間でも、動物でもない。

人から見たら得体の知れない怪物。

妖怪。

俺が本物の妖怪に出会ったのは、中学校三年生の2月。

15歳の誕生日を迎えた後。

俺は妖怪に殺されかけた。

妖怪といっても、俺を襲った妖怪は西洋妖怪の類だと――
あの人は言っていた。

でも俺は助かった。

それ相応の代償を払って。

一昔前だったら、俺が助かる方法はなかったらしい。この話は親友
の鳶町八雲と、もう一人の親友、朱佐黄龍しか知らない。
とびまち やくも すさ こうりゅう

単身赴任で地方に仕事に出ている父親にも話していないし（母はだ
いぶ前に亡くなっていてこの世にはいない）毎日朝から顔を合わせ
る妹の彩にですら話していない。
ひかる

自分が狼人間に襲われたこと。

狼人間の牙によって。

噛み憑かれて。

体の中に呪いをかけられて。

狼人間になった。

俺に噛みついた狼人間。

外見は、若干二十歳に見える姿形で。

彼女は美しい長い黒髪に灰色のメッシュ。赤い瞳にすらりと伸びた鼻。血の色のように真っ赤で暗がりでも目視できる唇。外見はとても美しい外国人女性のように、普通に、人間に見えた。

獣のような耳が頭の上にある以外は。

それでも俺は、電柱の下で頭から血を流して倒れていた女性をほうっておいてはいられなかった。（その時は夜も更けていて視界が悪く、彼女の獣の耳は萎れるように自身の長髪の中に紛れていたのが、人間としか見えなかった。）

瀕死状態の彼女は、俺に取引を持ちかけてきた。

不覚にも、俺はそれに乗ってしまった。

その日が満月だったのが、俺の運の尽きだったのかもしれない。取引が成立した後、彼女がピンと立たせた獣の耳を見た俺は無様にも足がすくみ、動揺し、隙を突かれて。

彼女に噛まれた。

彼女は自分が助かるために俺を同類にして利用しようとしていた。

満月の夜に――

自分の中に入り込んだ人狼の呪いに呼応し、その呪いに体が蝕まれて行くのを感じ、狂ったように夜道でのたうち回る俺は、
一人の老婆に拾われた。

竹宮千代美呼たけみや ちよみこ

彼女は、その手にまつわる専門家だった。俺に噛みついた狼人間を狩る最中だったらしい。

瀕死になるまで破壊した狼人間が逃走を図り、持久戦に持ち込んだ際に、俺はそれに巻き込まれたのだった。

そして俺は、彼女の助けによって自身に流れる狼人間の力を屈服させ、俺は助かった。

「もう授業は終わったよ。閃。」

机の上に突っ伏せていた顔を上げると、そこには親友の八雲が鞆を持って立っていた。

ゴールデンウィークが終わり、中間考査（簡単に言えば校内実力テスト）という重荷が外れた今日この日、6月2日。

くああ、と一欠伸。

「もう放課後？」

ぱりぱりと頭を搔いて再び親友を見上げる。

男にしては少し長めで茶色の髪（俺がみる限り幼稚園から茶髪なので、100%天然の茶髪である。）同じく茶色の瞳に、まだ中学生といっても通じるであろう童顔。

ボケ担当の俺の相方。

これが鳶町八雲。

俺、如月閃の無二の親友。

八雲とは幼稚園から今のここ、盟凰高校までずっと一緒だ。

クラスだって離れたことがない。

幼稚園から数えると、13回くらいクラス変えがあったはずだが俺と八雲は何百分の一の確率と偶然で、今の今までずっと一緒だった。

今考えるとすっげー偶然。

「早く帰ろうよ。朱佐も待ってるし。」

八雲は自分の鞆を持ち、俺の鞆を突き付ける。
終礼も終わったらいいし、帰ろうかな。

盟凰高校に入学して早二ヶ月。だいぶ高校生活にも慣れたし、この体にも随分慣れた。

人狼の細胞。

狼人間の呪い。

俺の体の中には人狼の細胞が寄生している。

化物。

妖怪。

怪物。

俺はどれにも当てはまる。

でも今は満月になっても獣のような耳が頭頂部から生える事もなく、自我を崩壊させる狂暴性も抑えられ、自分の人間の意識と意志を維持させている。まあ後遺症みたいなもので、歯と爪の強度が人並み以上になったし、歯と爪の強度はコンクリートをも粉砕できる硬さを、指先に力を入れれば爪の伸縮が自由自在になった。

次に、体が丈夫になりすぎた。

2メートルに跳ねられても、学校の屋上から飛び降りたとしても、怪我一つない。（この二つは今年の2月に実際に体験済みなので比喩表現ではない）

その二つを隠せば、ちゃんと「人間」と同じだ。

あとは、ステーキのレアが異常なまでに好きになったこと。
生肉とか、焼いてないウイナーを好む体になってしまった。

教室のドアの前には、朱佐が待っている。
俺よりもちよつと背が高くて、黒髪のストレートヘア。いかにも育ちが良さそうな顔つきに、運動神経も抜群で頭も切れる。

策士兼イケメン担当。

以上。この二人が俺の唯一の友人である。

俺達三人は数々の生徒達で賑わう廊下を喋りながら歩いた。

「聞いたよー。朱佐ってまた告られたんだって。これで何人目だよ。」

「八雲が肘で朱佐をつつく。」

「さあな。いちいち数えてられないさ。」

背も高くて頭も良くて運動神経も抜群。母親が外国人らしくて、日本人とは違う整ったハーフの顔立ち。ニキビ一つない色白の肌。これだけ揃ってりゃモテない訳ないよな。

恵まれすぎた男だよ。朱佐黄龍。家柄も良くて金持ちらしいし。

弱点が見当たらない朱佐黄龍。

でも。

「また振ったんだろ？」

俺が朱佐に振る。

「必要ないからな。」

そう。朱佐は彼女という存在を作らない。そういう主義らしい。ひょっとして結婚もしないの？朱佐君。

ぶいと朱佐は横を向く。その横を向いた先にいた女子生徒二人が彼を見てキャーキャー喚いている。

「朱佐くん！」

俺の横で朱佐を呼ぶ女子が三人。近距離なのに手を振る始末。三人共制服のネクタイが青なので上級生のようだ。

それに朱佐は笑顔（営業スマイル）で会釈を返す。

またも黄色い声援が湧く。

すぐ隣にいる俺と八雲の肩身が狭い。

「別に僕の肩身は狭くないよ。」

「え！？なんで俺のモノローグが悟られてんだ！？」

「何十年も一緒にいれば悟りは開けるものなんだよ。」

「どの賢者だよ！お前は！どこで学生から転職しやがった！あつ、さては前世は遊び人だな。色々が悪知恵働くから。」

「鳶町くんっ。」

後ろから声。

しかも女の子の。

呼ばれていないのに、俺と朱佐も八雲に続いて振り返る。

そこには女の子が一人。赤いネクタイなのでこちらは同級生。

「あ、あのっ。鳶町君のメアド。教えて下さい！」

女の子の片手には携帯電話がスタンバイしている。

「うん、いいよ。はい。」

八雲ははにかみながらテキパキと自分と相手のメールアドレスを交換した。

女の子は感謝の言葉を八雲に伝え、駆け足で去っていった。

思わず溜め息が出た。

「肩身が狭いな。閃。」

朱佐が不敵な笑みを向ける。

「お前が言うんじゃないよ！」自意識過剰過ぎる朱佐黄龍。

俺よりちよつと朱佐の方が背が高いので、別の意味で敗北感が積もる。

ここで補足。

如月閃。ツツコミ担当。

モテないって、嫌だね。

ちなみに朱佐が一番背が高くて182?。俺は176?。八雲が一番小さくて170?。

なんかいつでも二人の間違ってかんじで、これといって抜きん出た取り柄が見当たらない自分。

朱佐はクールで落ち着きのある大人ってイメージで通してるし。

八雲は存在自体が母性本能をくすぐるシヨタ系なので女子全般に好

評。（これは上級生の知り合いから教えてもらった）
彼の性格上、基本的に乗りがいいので男受けもそこそこ（男子からは年下の弟みたいと、評価はいいようだ）

俺は、そもそも人間じゃないし。

狼まがいの人間。

決して人間とは名乗れない。

下駄箱で靴を履き替え、自動販売機を過ぎたところに一人のクラスメートを発見。

白崎咲桜。

彼女とは入学式の後に神社で知り合い、同じクラスということもあって一度だけ会話をしたことがあるのだが、5月のゴールデンウィークを過ぎてから彼女の様子がおかしい。

最近クラスで人と会話をしていないようだし（授業中も放課中も、ずっと具合が悪そうにうつむいていることが多い）テストが終わった後から欠席や早退が多い。

その刹那。彼女と目があつた。

彼女は、俺の視線を拒絶するが如く目を逸らしてスタスタと学校を後にする。

白崎咲桜。

俺の知る限りの情報では、朱佐と同じ中学校の出身。

成績も良くて盟鳳高校には推薦で入学し、運動も出来る。

中学校では陸上部で部長を務めていたらしい。短距離走が得意で、

よく表彰を受けていたらしい。（これは全部朱佐から教えてもらった情報である）

ゴールデンウィークを過ぎる前までは、彼女は自分の前の席の先本小羽と一緒にいる。

落ち着きのある、物静かな彼女。

しかし今はどうだ。クラスで仲のよい先本とも話さなくなったし、顔色も悪くて話しかけ辛い。

体調が悪いのはわかるが、なぜこんなにも人を避けているのか。

重い病気にでもかかっているんだろうか。

実際病気を理由で欠席したりしている訳だし。

頑なに人を拒絶するようなオーラを放っている気がする。

こんな考えはただの憶測に過ぎないし、自分の勝手な想像と偏見で思い込んでいては彼女に悪い。

俺は八雲や朱佐にはこのことは話さず、他愛もない会話をしながら帰路についた。

それからは特に変わったこともなく日によって夏が近づき、我が盟鳳高校指定の冬服のブレザーから夏服へと衣替えになった。

校章入りのカッターシャツとチェックのツータックスボン。

中学生の時に制服の格好良さで盟鳳高校を選んだ甲斐があって、他の公立高校や私立校よりもお洒落である。そして女子の制服も可愛い。

また中学三年生の時に見た盟鳳高校のパンフレットのモデルの女子校生の姿を見て決めたともいえる。

自由度が効く代わりに結構難易度が高い我が盟鳳高校。

俺はなんとか一般入試で合格。

今は文化祭の準備が俺の背中を押している。

文化祭実行委員という俺の肩書が重くのしかかる。

クラスの委員会決めで、俺だけ熟睡していたことにより、勝手に俺の役職が決まってしまった。

男女二人でクラスの出し物を決め、その後文化祭の計画や準備などを切り盛りするのが文化祭実行委員唯一の役割。

しかも俺とパートナーを組む女子というのが、「白崎咲桜」だった。

白崎咲桜。いつもポニーテールで髪を纏めている物静かなクラスメイト。

今は病欠や早退を繰り返している彼女。

なんとなく、話しかけづらい。

みんな大好き夏休みが控えている中、俺はアルバイトと文化祭の準備で余裕がない。

そんなことを毎朝思いながら登校する。

今日は7月3日。

プール開きの日。

季節限定の体育の授業の水泳。

なんと我が盟鳳高校。男女混合で水泳をやるとのこと。

男子ウハウハ女子ブーイング。

もちろん健全な男子生徒である如月閃。

女の子に興味がないわけではありません。

でもこの場合だと女の子の体に、いやボディラインに興味あると言った方が正しいかな。

スクール水着を作った人は偉大だと思う。

こんないやらしいこと考えてしまうなんて。

結構人間らしくなったかな。

狼人間だった時は生きた感じがしなかった。もちろん人間ではなかった訳だし。

プールを楽しみに思いながら教室へと入る。

いつも通りの朝から賑わう教室。

いつも通り俺は自分の席に着く。

テストが終わわり、先週の木曜日に席替えが行われた結果

俺の後ろの席には八雲がいる。右横には朱佐がいる。

（こんなに都合良く俺達三人の席順が揃っているのは、クラス室長の朱佐黄龍の権力である）

「閃おはよー。」

後ろから八雲。

「おう八雲。朱佐もおはよう。」携帯電話をしまい込んで挨拶を交わしてくれる朱佐。

俺も鞆から携帯電話を取り出そうとした時、今日一番の失態に気付いた。

水着がないっ!!!!!!!!!!

衝撃的過ぎて立ち尽くす自分。

「どうかしたのか？」

「閃どうしたのー？」

多分、玄関に忘れてきたんだ。そうに違いない。

「……水着を…忘れた。」

俺の一言に二人は呆れた表情を見せる。

「50mの補充。頑張つてね。」

苦笑いの八雲。

そう。我が盟鳳高校の水泳の授業では病気や正当な理由ではない限り、必ずプールに入らなければならない。

水着を忘れたり不当な理由で体育の授業を休むと、授業の補修分＋1時間休むにつき50mの補充測定を受けなければ水泳（二学期の体育）の単位が貰えないというルールになっている。

ちなみに盟鳳高校のプールは、15レーンのコースがあつて長さが50mで水深2mの町内では珍しいプールである。（夏休みには市民プールとして開放している）

「めんどくせー。」

朝からテンションダウン。

崩れるように席についてうなだれた。

こうして如月閃の学校生活が始まり、水泳の補修も玄関に置いてきぼりにしてきた水着も忘れる程の出来事に、俺は遭遇してしまった。いや、今思えば自分から遭遇しに行ったのかもしれない。

——照りつける太陽。素足では火傷してしまうようなアスファルト。

現在水泳の授業。

ジャージに着替えてプールサイドで体育座りをする俺。

俺の視線の先のプールの中では、男子と女子が2レーンで分けられて楽しそうに泳いでいる。

ついさっき俺はシャワーを浴びている他の男子達を後目に女子達の準備体操（言うまでもなく全員水着）を、日陰の中のベストポジションで観察させてもらっていた。（さりげなく。女子達にはれないように。）

俺も健全な男子高校生。いや雄という立派な生き物なので、女性に無関心な訳ではない。

しかしそんな目の保養になる天国は、そう長くは続かなかった。

一人の体育教師に、

水泳を見学している生徒全員に水泳のプリントの書き写しが言い渡された。

最悪だった。

天国のような光景の水泳が、見たくもないプリントを書き写す授業に変わった瞬間だった。

書き写すのはプリントを見ながらしか出来ない。

よって、プールを見ることができない。

くく。水着見てくよ。

水が跳ねる音。数メートル先で笑いあう女子達の声。

俺は50分誘惑に耐えきってプリントの書き写しを終えた。

プリントを仕上げ、瞬時に視線をプールへ向けると、男女共にプールから上がっているではないか。

「せーんー！」

八雲が俺を呼んでいる。

男子全員で集合して終礼をするらしい。

書き終わったプリントを片手に、俺はのろのろと集合場所へ向かった。終礼を済ませた男子生徒一同は、向かい側に整列する女子生徒

達の水着をまじまじと眺めた。

もちろん俺もその中に入っている。

濡れた髪や照らされる水着と肌のコントラストが男共の煩惱を刺激させる。

拳げ句の果てに個人毎に点数をつける男もいた。

「いーよなー。あまみや　しのみ雨宮志乃美はさあ。」

俺の隣の男が目を見開いて前方を凝視する。

雨宮志乃美。

多分あそこ。名簿順に並んでるから先頭にいるローツインの女子。水着を着ているからこそ分かる彼女のメリハリボディ。

余計なものは無くて、出るところだけ出てるかんじ。

そんな世の男共の視線を釘付けにする彼女。

話したことはないが、噂は聞く。

いいとこのお嬢様とか。今まで誰とも付き合ったがないとか。

「次の授業は移動教室なんだから、早く行くよ閃。」

八雲が俺のジャージの襟首を引っ掴んだ。

まさに烏合の衆からはみ出た雛鳥状態。

餌が欲しいよ。

もつと水着見させるよ。

振り返って八雲に悪態を吐く。

「科学の実験の用意を集めて来るのが閃の仕事なんだから。早く行って僕達だけ早めに予習しておこうよ。」

ちなみに次の授業は科学。

三人一組に分かれて実験を行う授業。

体力的な事は俺担当。

実験を進行させるのは八雲。

最後にレポートにまとめるのが朱佐。

見事に三人の長所を生かしている。

でも今日は自分の水着を置いてきたこと女子生徒の貴重な水着シーンを余り見れなかったため、乗り気じゃない。

後ろからキャピキャピした女子達の声がする。

終礼を終わらせたのだろう。

悔いが残らないようにもう一度水着を見て目に焼き付けようとして向かい側を見してみる。

あーあ。みんなもうタオルとかで髪拭いちゃったりなんかしてるし。これはこれでそるものがあるのだが。

重要なのはそこではなかった。多くの女子生徒達が狭いプールサイドで賑わい、もつれ合う中、何かの拍子で一人の女子生徒がプールの中へ落ちた。

あれだけの人数と狭いプールサイドでごちゃごちゃしていたら思い浮かぶ光景だった。

女子達とは反対側にいる男子生徒達は爆笑し、誰が落ちたかと笑い合う。

俺も誰が落ちたかは気にはなったが、先程の二つのことで頭がいっぱいで笑いはしなかった。

向かい側の女子は混乱状態。

男共は笑っている。

ほんの少し時間が経って——普通ならすぐ上がって来るはずの女子生徒が、上がってこない。

ちなみに我が盟鳳高校のプールは水深2m。

足がつく奴なんてそうそういない。

やっと事態を察知した男共がどよめく。

「先生呼んだ方がいいんじゃない？」

バカ。遅っせーんだよ。

俺は八雲の手を払い、ジャージのままプールへ飛び込んだ。

プールの端から反対側の端まで泳ぐ羽目になった。

ジャージを着ているので体が思うように動かせず、ジャージが水を吸って重い。

しかし俺は人間に見えて人間ではないので、人間の常識はあまり通用しない。

並外れた体力を持っているので、疲れ知らずのこの体。ジャージの重みもなんのその、伸縮自在の爪を伸ばして簡易型の水掻きを作って潜って泳いで行くと。

水の中で一人の女子がもがいている姿を発見した。

俺と同様の見学者だったのだろう。水中でもがく彼女もジャージ姿だった。

ひとまず彼女が生きている事を視認し、爪を縮ませてから暴れている彼女のジャージの肩を掴んで水面へと引き上げる。

その時俺は、驚くべきものを見てしまった。

俺の中学三年生の冬の出来事を彷彿させるような光景。

彼女の足には、ヒレがあった。二本の——人類の足ではなく。

まるで海洋類のヒレが下半身にくっ付いているような。

人魚。みたいな。

「ぷはっ。」

俺達二人は無事に水面から顔を出した。

流石に俺でも水中では呼吸出来ないの、水面から顔を出してたっ
ぱり息を吸って呼吸を整える。

その時俺は初めてプールに落ちた女子の顔を見た。

白崎咲桜。

最初は神社で出会い、中学校では元陸上部の部長を務め、最近
は病欠や早退を繰り返す白崎咲桜だった。

ショックが何かで水面に上がった時から気絶している。
幸い呼吸はしているので一安心。

している場合ではなかった。
そう。今彼女を陸に引き上げれば、絶対に周りはパニックになるだ
ろう。

プールサイドからは見えなと思うが、彼女の足にはヒレがある。
すねのあたりなんてウロコとか生えてるし。

何とかして彼女を助けるため、俺は片手でジャージの上着を脱いだ。
（もう片方は白崎の肩を掴み。足は沈まぬように必死にばた足である）

そのジャージで彼女の素足の部分に巻き付けてヒレを隠す。

やっとのことでプールサイドに上がり、彼女をお姫様抱っこで持ち上げる。

彼女のヒレしか頭に入っておらず、周りの世間体なんて気にしなかった。

「閃!!」

慌てた八雲と朱佐が駆け寄る。

「わりい。保健室行くフリして早退するわ。なんか言い訳しといてくれ。」

状況を察知したのか、八雲は走ってプールサイドから出て行った。

「早退の理由はそのジャージか？」

朱佐が尋ねる。鋭い奴だよまったく。

「そんなもんよ。あとで話すよ。」

楽しみだな。と朱佐の言葉を苦笑いで紛らせてプールサイドから出ると、プールの入り口に八雲が待っていた。

「サンキューな。」

八雲は俺に鞆と制服を渡した。こっちは気の利く奴。

「先生には朱佐と僕で誤魔化しとくよ。」

「わりいな。」

「モスバーガーね。セット付きの。」

「高いのは無しな。」

八雲が鼻で笑った。

交渉成立。

俺は八雲に別れを告げ終え、こそこそと裏側の校門を出た。

これから向かう場所は一つ。

駄菓子屋である。

学校の授業をサボって俺達二人が行き着いた先は、何の変哲もないただの駄菓子屋である。

しかしその駄菓子屋でしか出来ないことがある。

俺が狼人間になった時に、色々と世話になったこの駄菓子屋「竹宮亭」。

今俺は竹宮亭の座敷に腰をおろしている。

すぐその布団の中には、先程救出した白崎咲桜が意識を失っている。（睡眠とは近いようで違うようだ。）

竹宮亭についてすぐに八雲からメールが届いた。

うまい具合に誤魔化せたらしい。

それにしてもこの駄菓子屋。80年代臭さがプンプンする。

いや俺は平成生まれだからこの雰囲気は懐かしいと思う訳ではない。色々な媒介のメディアを取り入れて育ってきたので、これしき一般知識として記憶している。

古めかしい障子に足を畳まれて収納されているちゃぶ台。
古そうでも汚れてはいない手入れされた七畳の畳。

住宅化が進むこの町で、唯一この駄菓子屋だけが時代から取り残されている孤立感があった。いや、あえてそうしているのかもしれない。

俺が鞆に手をかけた時、丁度白崎が意識を取り戻した。

「ここは…。」

「ただのしがない駄菓子屋だよ。お前プールに落っこちたんだぜ。」

「見たんだな。」

一瞬だった。

掛け布団を被せられて。

気が付いたら、俺の上には白崎が見下ろしていた。

片方の手で俺の首を押さえ、もう一方にはシャープペンシルが、ペン先が怪しく光る。

「ちょっと！待て待て待て待て！落ち着けっ！」

「お前が落ち着け。もう一度聞けぞ。見たんだな？私の足を。」弁解の余地はなかった。

口封じってやつ。

彼女は鋭い眼光で、威圧的なオーラを放って。

俺を脅迫する。

手荒なことはしたくないんだけどなあ。

ひとまず冷静さを取り戻してもらいたい。

「とりあえず！とりあえず落ち着いてくれ！」

大事なことで2回言った。

しかし彼女は微動だに動かさず喋らず俺を睨みつけている。

「見たのか見てないのか。どっちだ？」

どうやら発言はそれしか許されないらしい。

はぁ。と深いため息。

「見たよ。」

と一言。その刹那。思い切り彼女の腕が振り下ろされたので反射的に身構える。

目を開けると。俺のすぐ横、頬のすぐ真横にシャープペンシルが畳に深々と突き刺さっている。

恐怖。

もし刺さってたら相当な。考えただけで身の毛がよだつ。

ポツン。と頬に落ちる水滴。

間違えた。

目線を前に向けると、彼女から涙が。

ぽつぽつと。

俺に当たる。

「好きで……。こんな体に……。なつた訳じゃ……。ない。」

涙を拭い、再び俺に眼光を向ける。涙で余計に光っている彼女の瞳には、何とも情けない男子高校生の姿が。

「なにをしておるんだ貴様等は、行為に及ぶのならホテル（よそ）でやらんかい。」

無粋な。

天の邪鬼な。

KYな。

救いの手が、俺の手に差し伸べられた。

部屋の入り口の前にはこの駄菓子屋の主、竹宮千代美子が立っていた。

そうこの竹宮千代美子こそが。

狼人間だった時の俺を助けてくれた人物である。

「どうしても言うから部屋を貸したというのに、お前は発情する

ためにうちへ来たというのか。」

「誤解だっつの！俺を変態みたいな設定にするな！こいつのことに
ついては色々あるんだよ！」

誤解を解こうとしたが、千代美子からのげんこつで俺は畳に埋まっ
た。

「あーあ畳がこんなに。こりやまた借金が増えたなあ。ほれ、起き
んかイヌ。」

竹宮千代美子。

年齢不詳。

外見は二十代後半。毎日色鮮やかな着物を着て、後頭部にあらんば
かりの簪を刺しているのが特徴だ。

ここで一つの矛盾点を挙げると。

俺が初めてであった時の彼女は、外見が今とは比べ物にならないく
らしいの年寄りで、突いたらコテンと倒れそうな背の低い老婆だった。
外見を自由自在に変えることができる女。なぜそんな非科学的な芸
当ができるのかは今伏せておこう。大事な伏線なのだから。

今は二十代後半の顔立ちで、俺と白崎を見下ろす。

背はスラッと高くモデル体型。

でも腹黒い。

「ついてっ！」

「なんか言ったか？イヌ。」

そのくせ暴力的。命の恩人とは思いたくない人物No.1である。
ちなみにイヌってのは俺のこと。

狼人間だったからね。

「畳の修理代で借金はプラス10万円だな。」

「そんなばったくりがあるか！！」

ちなみに今俺が抱えている借金の総額は300万円+10万円。

300万円の借金を負うことで、俺は狼人間から元の人間に戻れた。
(完全にはないけれど)

そして、俺の体にのしかかっていた白崎が名乗りを上げた。

「ご迷惑をおかけしてしまつてすみませんでした。白崎咲桜です。」
さつ、と俺から離れてお辞儀をする白崎。
もう涙は流していない。

「礼には及ばん。如月、詳しく説明してもらおうか。」

俺はついさっきまでの出来事を全て説明した。

白崎がプールに落ちたことから始まり、そして溺れていた彼女を助けてみると、足が尾ヒレになっていて、下半身は鱗みれで、まるで人魚だった。と、

「今はヒレなんて生えておらんがの。」

千代美子が白崎の下半身をまじまじと見つめる。観察するようなフリをしていて、実はこの事態の何もかもを見透かしているような気がするの俺だけだろう。

「水に浸かると、変わってしまうんです。」

えらく冷静に、冷ややかに白崎は言う。

「いつから変わるようになった？」

千代美子が質問すると、白崎はうつむきながら、先程と同じ口調で答える。

ゴールデンウィークを過ぎてから。と、

「最初はお風呂に入った時でした。その時すぐ湯船から出たら元に戻ったのです。」

段々治るのに時間が掛かるようになった。と、一向に顔を上げようとしていない彼女。

「どうしてそうなったのか。心当たりはあるか？」

「ゴールデンウィークに家族で湖に行つて、妹と二人で人魚の伝説が奉られている鍾乳洞の中の奥の御堂にあった綺麗な石を取ったことが、……原因だと思います。」

「その鍾乳洞とは、滋賀にあったものではないかの？」

その言葉に、白崎はふつ、とうつむいていた顔を上げ、酷く驚いた表情で目を細めて不敵に微笑する千代美子を見た。

「どうしてそれを……。」

「古い文献で得た知識よ。その昔、十人もの人数の話を聞ける変人が滋賀で人魚を見たと言われとるらしい。人魚と言われたらそれぐらいしか思いつかんのどのう。図星かの？」

こくり、と一回うなずいた彼女は再び顔をうつむけた。

その変人は多分、歴史の教科書に登場する聖徳太子の事だと思うのだが。

「綺麗な石。と先ほど申したが、それは本当に、石だったのか」

「鍾乳洞を出るまでは石だと思っていました。でも、もう一度手に持ってみたら、軽石みたいに軽くて、ただの塊のようでした。」

「その石はお前が持ち出したのか。ふう……。よいか。それは石ではなく人魚の破片、いわば肉塊と呼ぶにふさわしいモノじゃ。その肉塊には人魚の魂が込められておる。御堂は魂を込めておくための結界じゃ。その結界から解き放たれたならば、言わずとも解るじやろう。」

人魚の魂が解き放たれる。

「でもそれが何になるんだ？」

思わず口を挟んでしまった。千代美子の物事を焦らす口調に俺は我慢が出来なかった。

「現世に色々と水害などが出ると憶測できるが、この人魚はまだ性質のいいやつでよかったのう。この少女を呪うだけで満足している。」

「今でもすぐ近くで憑いておるぞ。と、ドスの利いた声を出す千代美子。」

辺り見回す俺と白崎、しかし四畳の畳部屋には三人しかいない。

「その呪いを解く方法はないのかよ」

「あるぞ。その娘一人では無理じゃが、お前がいれば大丈夫じゃろう。」

にやり、と笑って見せる千代美子。

「それじゃ、気をつけてな」

千代美子から解決策の御教授を受け、時刻は夕方になった。

白崎の家の近くまで送って行き、別れの挨拶を告げる俺。彼女は軽く会釈をして立ち去って行ってしまった。

思えば竹宮亭での襲撃以来彼女とは一度も喋ったりはしなかった。

竹宮亭で事件の発端と解決策を聞いた俺にはそれ以上彼女と関わることはないのだが。

前に——神社で初めて彼女に会った時とは違っていた。

上手く言い表せないのが苦渋だ。

あの時と、今の白崎咲桜は何かが違う。

竹宮亭で聞いた人魚の呪いとやらは、足だけでなく人格も変えてしまっただろうか。

考えても無駄だな。

こういう事は専門外と悟り、千代美子の言葉を思い出した。

「代わりに背負ってやれ。」

今思えば意味も分からずに了解を得てしまったことを後悔し、（拒否したところで借金が増えてしまうと本能的に察知したのが盲点だ）俺はくるりと踵を返して自宅へと歩いた。白崎の家の近くまで送って行き、別れの挨拶を告げる俺。彼女は軽く会釈をして立ち去って行ってしまった。

思えば竹宮亭での襲撃以来彼女とは一度も喋ったりはしなかった。竹宮亭で事件の発端と解決策を聞いた俺にはそれ以上彼女と関わることはないのだが。

前に——神社で初めて彼女に会った時とは違っていた。上手く言い表せないのが苦渋だ。

あの時と、今の白崎咲桜は何かが違う。

竹宮亭で聞いた人魚の呪いとやはらは、足だけでなく人格も変えてしまふのだろうか。

考えても無駄だな。

こういう事は専門外と悟り、千代美子の言葉を思い出した。

「代わりに背負ってやれ。」

今思えば意味も分からずに了解を得てしまったことを後悔し、（拒否したところで借金が増えてしまうと本能的に察知したのが盲点だ）俺はくるりと踵を返して自宅へと歩いた。

咲桜マーメイド 中編

翌日、白崎咲桜は予定の待ち合わせ場所にやって来た。

夏も近づく暑い日の駅前に――彼女は来た。

今日は休日なのに、なぜか学校の制服で。

俺自身彼女の私服を見たかった訳ではないのだが、授業がない休日に制服というのは。何かあるのだろうかと不信感を抱かせる。

そうそう。いきさつを説明すると、これから俺達二人は滋賀県へ旅立つ。休日2日をフルに使って、白崎咲桜を救う。

実のところ、彼女が呪われるのではなく本来は彼女の妹が呪われていたらしい。

偶然。

「お姉ちゃん。アレ取って！」

偶然に、ただ妹のためだけに御堂の人魚の石に触れてしまったから。

妹の願いを引き受けた結果。

手に持っただけで。触れただけで。彼女は人魚に呪われた。

「そういえば。一泊泊まりになるらしいんだけど。宿泊施設ってどこに泊まるか知ってるか？」

改札口を過ぎ、スラスラと新幹線へ乗って指定の席についた後の俺の発言。

前日の夜に詳しく話を聞こうと竹宮亭へ電話した時、「全て白崎に話してある。二度説明するのは御免じゃ。」の言葉で通話を切られたため、俺は先程白崎咲桜から貰ったこの新幹線の切符以外、この旅の詳細を詳しく知らない。

滋賀県の海の御堂へ行つて、彼女を人間に戻してもらおうとしか――
「大まかにしかわからなかった。「なあ。」

「なにか？」

……………なぜか空気が重い。

隣の席に座っているのに、目に見えない壁で包囲されているような、
圧迫感のあるこの空気はなんだろうか。

俺って、ただの後見人だけなのか？

親の買い物に付いていく子供のような。（その癖自分のお目当てのものは何も買ってもらえずにただただ見てるだけの）

ただ隣にいる彼女、白崎咲桜を鍾乳洞の御堂まで連れて行くだけの存在だったのだろうか。

「竹宮さんから何か聞いてるか？」

とりあえず話題を作ってみる。

「守ってもらえ。と聞いた」

表情を崩さず、淡々と、静かに言葉を並べる白崎。
守るって、ちょっと待て。

まさか俺って誰かと、いや「なにか」と闘わなきゃいけない運命だったりするのか？

「俺がその場でお前を置いて逃げたらどうするんだよ」

まあ少なくとも、そんなことをする予定はないんだが。

「お前は私のことが好きだからそんなことはしない。と竹宮さんは言っていた」

え。なにそれ怖い。

いや別に嫌いではないよ？クラスメイトだし。

縁あって助ける。と言ったらいいのだろうか。

うん。俺は白崎がいい奴って知ってる。

でもこれって間接的な告白じゃないか。

困る困る。

「先本が心配してたぜ。」

急遽話題変更。自分から振ったくせに。

先本というのは、俺と白崎咲桜

と同じクラスの同級生の先本小羽。

主観だが白崎とは彼女が一番仲が良かったはず。

先本の名を出した瞬間、俯いたまま喋らない白崎。

ずっと前から思っていたが。

白崎咲桜。なにかおかしいぞ。

「入学式の時と印象変わったよ。お前」

依然として俯いたままの白崎。そのまま喋り続ける俺。入学式の時、俺は初めて彼女と出会った。

その当時と今では、別人のように人が違う。

「人間」なのか、はたまた「妖怪」なのか。

「まああんな体験しちまえば人間一つや二つは変わっちまうとは思うけど…。なんか引つ掛かるんだよな。」

俺も変わったと言えば、変わってしまったのだろう。

精神的にも。肉体的にも。

入学式の人に初めて出会った彼女と、ここ最近の今の彼女。

俺個人の直感だが、なにかが違う。

「人魚の件の他に、なにがあった？」

暫くの間沈黙が続いた。

乗客の声や新幹線の走る音。

「治し方を…調べた」

治し方。人魚という。体の下半身が魚のヒレになるという。

それを治す方法。と彼女は答えた。

「調べるって言ったって、どこでさ」

「……ネットで」

は？

一度俺は呆氣にとられた。

あまりのあっさりした回答に。

ネットって、パソコンの？

こういう話ってネットとかでもあるの？

俺は携帯電話しか使わないのでパソコン関係には疎い。そもそも自宅にパソコンがない。パソコンやネット関係には疎い俺には専門外なので、ここは関係なさそうだ。

「疎い」

その単語で感じた。昨日との違い。昨日と今日の彼女。

今は儚げな表情で、悪く言えば生気のない顔で車窓に映る景色の方を見ている。

眠たそうな目。血の気の無さそうな唇。どこを見ているのかわからない視線。細くて綺麗で長い黒髪。俺自身も黒髪だが、彼女の方が色も艶も良かった。よく手入れされているのだろつ。（俺はごわごわした真つ黒な墨汁をかけたような黒髪）

日に日に彼女は表情が、感情が薄れていつている。

そんな気がした今日この頃。

これは俺個人の記憶を辿って行った先に行き着いた結論である。しかしこんなことを一人で考えても無駄だ。

彼女が人間に戻りさえすればそれでいい。

ふと窓越しからの景色を見ると、田舎町を越えた先に海が見える。海なんてここ最近見てないな。

俺は海が好きではない。どっちかっていったら川の方が好き。

潮風とかしょっぱいのが苦手な如月閃です。

あとクラゲも苦手。川とかにいる蚊やハエなんかは虫除けスプレーでなんとかするためさほど問題ではないがクラゲは別物。

「海……」

ぼそぼそ、と。隣で呟く声。白崎咲桜が自主的に何かを呟いている。

「海がどうかしたか？」

「……綺麗」

日差しに当たって海面が光っているように見える景色を、俺達二人は眺めた。

「海。」

衝撃的な光景を目の当たりにした。

彼女が、白崎咲桜が、笑顔に向けた。しかも俺の方に向けて。

……………。

幼い子供のような。ひよつとしたら俺の妹の彩の笑顔よりも幼い。屈託のない純真な笑顔。

長い睫毛や閉じた瞼。笑った口元と表情が、全て一つの物になった

ようだった。（まあ相変わらず唇の血の気はなさそうなんだけれども）

正直可愛いです。

泣き顔や鉄面皮のような無表情な顔しか見たことがなかったため、この笑顔はとても貴重だった。

咲桜マーメイド 後編

おっと。

ひよっとしたら寝ていたのかもしれない。

慌ててズボンのポケットの中の携帯電話を取り出して現在の時刻を確認する。

よかった。駅から発車してからそんなに時間は経ってはいない。

丁度よく車内アナウンスが謳う。あと一時間で目的の駅に着くとのことだ。

たしか…彼女の貴重な笑顔を見てから、寝てしまったのだろう。

隣にはすやすやと寝息をたてながら座席で眠る白崎咲桜。

長い睫毛。良く手入れの行き届いた綺麗な黒髪。

普段は鉄面皮のような無表情を表す彼女のこの寝顔もまた、笑顔と並ぶ貴重なものだった。

これから何が起こるのか。

行き先。湖の鍾乳洞の中の御堂

目的。

白崎咲桜が持っている人魚の石を、御堂に返すこと。

テレビドラマやアニメやマンガの見すぎなのだろうか。
こういう時というのは、なんだか嫌な予感しかない。

だって俺狼人間もどきだし。

狼人間という言葉事態にこそ現実味が全くない。
テレビゲームである。マンガである。とある小説のキャラクターである。二次元の世界や昔話や童話。はたまた神話などでしか語られないような言葉だ。

狼人間に噛まれた傷痕はもう消えてはいるが、満月の日には時々首の傷痕あたりがズキズキ痛む。（首に痛みを感じた時は、いつも満月なのだ）

過去を思い出す。

そう。あの時の俺はお人好しだったのさ。と、軽く自己解決で自己満足で終わらせる。

見ず知らずの、しかも狼人間を助けた自分が悪い。（まあ狼人間だったというのは後から聞いた話なのだが）

仕方ない。と今は割りきっている。

人間は失敗から物事を学ぶものだ。

では狼人間はどうなるだろう？

外の景色はもう夕方になりつつあるようだ。

それを確認したすぐ後に車内からのアナウンス。

間もなく到着する。

座席の上に置いてある鞆を下ろして降りる準備をする間際――

――そうそう、白崎を起こさなきゃ。

鞆を座席下に下ろして隣の席を見ると、彼女はすでに起きていて、夕方の景色を見ていた。夕日がオレンジ色に見える。

「起きてたのか。」

こくん。と景色を見ながら頷く彼女。

「もうすぐ到着だつてさ。降りる準備しておけよ」

もう一度頷いて、彼女は自分の荷物を持って座席に座り直した。

午後6時。旅館前。

駅から数十分歩いて到着した旅館。

我々二人が宿泊する宿である。

湖から近いので、竹宮が事前に手配してくれたらしい。（宿泊費などは当然俺達二人持ち）

割と古風な造りになっていて、武家屋敷のようである。

決して汚いわけではなく、手入れや掃除も満遍なく行き届いている。

旅館内も綺麗だった。廊下もホコリ一つ無い、ぴかぴかに磨かれている。

料理の方は、宿泊金額相応の物が出された。かといって不味くはない。いたって普通の和食。

「すつげ。ここから湖が見える。」

俺達二人が泊まる部屋の窓からは湖が見える。

窓を開けたらそこから先は湖。

景色は湖一色。その湖に写し出される月。なんとも幻想的だ。

風が吹いているようで、水面が揺れ、それに映る月もぐにやりと歪むように揺らめいている。

「……………近い」

布団の中にいる白崎が呟く。

一人だけ自分で布団を敷いていた。

まだ夜の8時回ったばかりなのに。最近の女の子って早寝なの？

うちの妹は11時ぐらいに寝るのに。年の違いで就寝時間が違うのだろうか。他に理由があるのだろうか、今の俺では解明できなさそうだ。

「近いって何が？」

「……なんでもない」

即会話終了。実にシンプルである。

しかも質問には答えてもらっていない。

「思っただけどさ」

つられて布団を敷く俺。彼女の布団との距離は遠い設定。

「お前本当に白崎か？」

彼女は寝返りを打つだけである。

まあ…気を取り直して、今のはただの戯れ言ということで。せつせと布団を敷く。

「ではお前は誰なんだ？」

布団が喋った。ではなく、布団に潜った白崎からの質問。少しばかりか、声のトーンが低い。

布団に潜っているお陰で声がかくぐもっているせいではなかった。

「質問に質問で返すなよ。俺は如月閃。ご覧の通り丸腰だ。」

敵ではないよ。と付け加える。普段はしない俺の貴重なボケの振りに構わず、布団からはモゴモゴと喋る声。

「私は私。白崎咲桜。」

「いや。俺の思い描く印象とは若干ギャップがあるんだよね。なんとなく。お前は白崎であって白崎ではない。ん〜。多重人格？竹宮亭の時と今じゃ全然ちがうもんお前。」

「ここは私の場所だ。力も強くなる。つまり、意のままなんだよ。この私こそ私だ。呪いだって知ってるのだろう？」

声は白崎咲桜のそれと変わりはなかったが、雰囲気と布団からにじみ出る気配は全くの別物だった。過去に感じたことがある。人ではない気配と雰囲気と威圧感。

「いつからだ。いつからお前が出てきた？なんていうか…もしかして全部お前だったのか？」

「いつも。いつもいつでも私は私さ。当然、この体の主だってこの光景を見ているぞ？毎日毎日毎日毎日毎日怯えながら。私と小娘の意識は共有しておる。ただ、日が経つに連れて私の力が強まっていつておるだけの話だ」

「なるほどね。意識はあっても表には出て来れず——今の白崎には意思がないのか。」

確認完了。今布団の中にいるのは、たかが変な石っころの精神だ。

「白崎を返せ」

言いたいことはそれだけ。語勢を強めてもう一度言う。

「返せぬ。と言ったら？」

嘲笑うような質問が返ってきた。

「腕ずくで返してもらう。荒業と力業で。」

表現に出していなかったが、彼女が布団に潜った時からただならぬ気配が俺の体を突き抜けていく。布団からの殺気と冷気。

「条件がある」

「条件？」

反射的な受け答え。布団は話を続ける。

「そつだ。明日の明朝に、湖の鍾乳洞の御堂へ来い」

「言われなくても行くつもりだよ」

「そして私の肉体を御堂へ奉れ。以上だ」

「それで白崎は返してもらえるんだな？」

それから返事はなかった。

まさかのノーコメント。おいおいおい！話になってないし答えも聞いてねえじゃねえか！

「答えやがれ！」

その時先程の殺気や冷気は徐々に薄れて行くようで、しびれを切らして俺は勢いよく掛け布団を引き剥がした。

衝撃の映像。

中には浴衣のはだけたほとんど裸の白崎咲桜が一人。

横になって丸まって寝ている。

一本一本が細く、いつも一つに纏めているポニーテールをほどいた長い髪。閉じた瞼に長い睫毛。唇はほんのり桃色になっており、新幹線の車内で見たような血の気の無い唇ではなかった。

帯が緩んでいて、艶やかに魅せる肢体と浴衣。

な…ナイスバディ。

ふと彼女と目が合った。

あ、寝てたわけじゃないんですね。

気が付いたら吹っ飛んでいた俺。起き上がると同時に腹部に鈍痛。勢いよく腹を蹴られた模様。

「おおおおお。お前ええええ!!」

発狂して半泣き赤面の白崎咲桜。

何がどうなったのか意味不明な俺。

どろいちゃった。

「ちょっと待て！布団を引き剥がしたことは謝るから！まずは確認！そう自己紹介！な？俺は如月閃」

煩惱を刺激する生々しい映像と鈍痛でパニック状態の俺。

本日二度目の自己紹介の如月閃です。その直後に枕の投擲。

見事顔面で受け止めて尻餅を着く俺。

「ふざけるな！裸の確認する奴の話なんて聞けるか！！」

こっち向くな！と座布団の投擲。見事両手で受け止める俺。

今度は俺の方が布団に潜る番だった。

布団を被つてからでも聴こえる、浴衣を着る生地の擦れる音や帯を締める音が妙にいやらしく感じられた。

少し経ってから布団越しからの鈍痛。多分また蹴りだろう。俺の脇腹に100ダメージ。

「…………話がある」

高圧的な声だった。まだ根に持っているに違いない。

「布団越していいのなら」

身を縮めて防御の姿勢を作る。脇腹つて案外蹴られると痛いのだと痛感した。

「聞こえにくいんだが」

「こっち向くなつて言ったのはそつちだぜ」

「謝るつて言つたくせに謝罪の一言もないぞ。嘘つきの変態の布団野郎」

へんなあだ名をつけられた。

さながらあつちさはさつきまで布団女だった癖に。

「っ痛てっ!」

再び脇腹を蹴られた。しかも同じ場所。謝罪が無いのならまた蹴るとの脅迫を受けた。

「ごめんなさいごめんなさい。お許し下さいお助け下さいごちそうさまでした」

暫くの沈黙。

モソモソと布団から顔を出してみる。

目の前には白崎が体操座りで畳の上に腰を降ろしていた。

「謝りました」

「最後の言葉の意味がわからないんだが」

「…………誤りました」

文章でしかこの表現を表せないのが残念である。

「もう怒ってない」

「ごめんなさいでした」

ひたすら謝ってからの布団から脱出。

「白崎…咲桜か？」

「もちろん。白崎咲桜。お前と同じ文化祭実行委員だ」

「好きな食べ物？」

「卵かけご飯」

「TKG……！」

思わずツツコミを入れずに現代風に略してしまった。

ツツコミ担当と自嘲していた自分が嘆かわしい。

「今はアレはいない。私の体のままの私。白崎咲桜だ」

アレ。きっと、先程彼女が布団に潜っていた時の声の主。

ただの石つころの意思なのだろう。

「アレは今お前の体にいないのか？」

「今は感じない。自分の体に…自分とは違う他の意思はない」

多分。と、自分の胸に手を当てる白崎。

「でも、気配は感じる。体の中にいた時とは違うような…大きい力の気配」

顔を下にして俯く白崎。微かだが震えている。怯えているようにも見える。

「……………」

そのまま無言の白崎と俺。無言だからといっても、俺はぐちゃぐちゃになった布団をせつせと元に敷き直している。泊まりに来ているのだから、礼儀としてね。ちゃんと布団を敷いて、マナーを持って宿泊。

「そういえば」

ふと、白崎が沈黙を破った。

「どうしてプールに落ちた私を引き上げたんだ？水の中で見たんだろ？私の体」

と、思い出したように問う。

人を疑い、探るような目付きだった。先程の怯えたような表情はすでに消えている。

こういうところがメリハリあるんだよな。割りきっているのか。

人格が違うような。

「俺も…似たようなもんだからさ」

ニカツと快活に笑って見せる。

同類。だけど今では後々の自分の成長を促したイベントのようなもの。

ロールプレイングゲームの主人公が悲しい経験をして、悔しさや悲しさをバネにして強くなっていった話のような。

簡単に言えばそんなもんなったよ。って。

それだけの話。

こんな経験もたまにはいいもんさ。

俺は最後にもう一度笑って言葉を締めた。

「同類……」

俺の台詞をリピートして考え込む彼女。

「俺は自業自得っていうのを身をもって体験体感したんだよ」

そう付け足して、俺は再び布団に潜った。

布団に潜ったとしても安易に眠れる訳ではなく、俺はしばらく眠りにつけなかった。

目を閉じると、今まで起こったことがカメラのフィルムのように浮かび上がってくる。

すぐ横で、もぞもぞと動く気配がしたが気に止めなかった。

「まだ起きてたのか？」

「あつちにいると冷房が直に当たって寒い」

リモコンってないのかよ。と、問う。

「オンとオフのスイッチしかなかった」

かなり古いタイプの冷房らしい。「……………ありがとう」

御礼を言われた。ここにきて初の御礼。今思えばここまで一回もまともに彼女と会話をしていないと思う。

いや、うまく会話が成立していなかった。と言う方が正しかった。

今の彼女には彼女自身の意志が通っている。そう感じる。

口調こそあまり変わりはないのだが、確固たる強い意志がひしひしと伝わってくるようだ。

「なんてことないって。友達だから助けたまでさ」
彼女の強い意思に呼応して、自分も本音を告げた。
友達が苦しんでたら助ける。と、幼い頃に母親に言われたことがある。そう告げて――母は逝ってしまった。

それ以降俺は友達を見捨てたことはない。
その延長線のような親切心を狼人間に振る舞ってしまったから。
俺は呪われ俺は自分を呪った。

「私が…友達…」

「おう、友達。同じ文化祭委員の相方だからな」
「チャライんだな」

背中に鋭利な刃物で刺されたような気がした。
「しかも偽善者みたいな」

背中に鋭利な刃物で刺され、さらにまた同じ箇所には刺されたような気がした。

「そう言われても仕方ないんじゃないかな？悪くいえばそうなるし。
でも俺は変える気はないぜ？このスタイル」

チャラくても偽善者でも構わない。
だが俺は友達を大切にする。
友達を助ける。

それだけだ。言い訳も弁解もしない。

「そう返ってくるとは思わなかった。言い訳するか…怒るかと思わなかった」

鎌をかけていたらしい。

「怒んねえよ。事実だし」

怒っていない証拠にハハッ。と笑って見せる。何故鎌をかけていたのかは不明だが。

「噂通りの奴なんだな。小羽の言った通りだ」

ここで先本小羽登場。白崎咲桜の友人であり、俺と同じ中学校に通っていた少女。

「噂って、一体どんな噂だよ。先本の言ってたことも気になるし。でも、お前が噂をアテにするキャラには見えないな」

そう言うてから、暫くの沈黙。

就寝したにしてはかなり早い。寝つきが良いにしても良すぎるレベルだ。

「人当たりが良くて、よく喋る。義理堅い奴だと小羽から聞いた。全部当たってたな」

「先本とは中学の時三年間同じクラスだったからな。よく観察してらっしゃる。あいつの観察力はすげえからな。誘導尋問とかかなり上手そうだ」

先本の話で俺達は笑った。共通する話題があると話も弾む。

「噂は…」

会話が弾んだはずが、急に、彼女の声のトーンが低くなった。俺に疑問を抱かせるような不安そうな声色だ。

「如月の…付き合っていた彼女が…亡くなった。って…」

一言一言に声が小さくなって、とても言いづらいかのように、彼女は噂を話した。

彼女の声が小さくなっていくことに、俺の脈打つ鼓動が早くなっていくようだった。

「すまない、嫌なことを聞いた。謝る……ごめんなさい」

俺は暫く黙った。彼女の謝罪が耳を通り抜けていくのを感じて。

中学三年生の時、俺は彼女を失った。死んでしまった。いなくなってしまった。自分も、死んでしまいたくなった程に。彼女のことを好きだった。

それは今でも、大好きなんだろう。彼女が生きていたら、という話で。

再び白崎が謝った。反射的に答える俺。

「俺こそ黙っちまってごめん。まあ……うん。その噂は本当。死んじまったんだよ。事故でな」

「ごめん……」

一気に重い空気になってしまった。何故か責任感を感じてしまう。話題を振ったのは彼女の方だが、興味本意ということもあるだろうし。

噂は噂なのだったのだろう。真実が知りたかった。

自分にも同じ経験があるから理解できる。

「白崎には……彼氏とか、いるの？」

苦し紛れの話題。

他に思い付かなかったんだもん。「彼氏は……いない。妹が、作ってはいけないって……」

「亭主関白ならぬ妹関白!!」

身内に恋人を作っではいけない家庭を初めて知った!

勢い余って思わず布団から飛び上がってツツコミを入れてしまった。

「一体どんな妹だよ…」

「だから彼氏はいない」

「……複雑な姉妹関係なんだな。なんで彼氏作っちゃいけないんだ?」

「妹が…私の事を好いてるから…らしい」

「重すぎるシスコンっぷりだ!!」

何故か顔を赤らめている白崎。

俺がツツコミを見れた後に掛け布団で顔を埋めても赤面を隠しきれ
てはいなかった。

「好きな人とかはいなかったのか?」

この質問はスルーされた。

顔を埋めたまま黙りの白崎。

俺も一時冷静になって、再び眠りにつこうと励んでみた。

静寂の間に針時計の秒針を刻む音だけが部屋一帯に響き渡る。

月明かりが部屋を照らし、もう深夜を回ったようだ。

「如月」

「起きてるよ」

呼ばれたので一応返事。時計の針の音を一回一回数えていたことは
内緒だ。

「男に友達だと言われたのは初めてだ」

「ほうほう」

「妹に怒られる」

「なんでそうなるんだよ！」

意味不明だった。どういう経緯で妹に怒られるんだ。

白崎の家庭の実権は妹が握っているのか！？

ていうかなんでお前は妹に弱腰なんだよ！

「でも…ありがとう」

「色々という意味深なセリフを言ったくせにさらっと切り返すんだな」
白崎咲桜。メリハリのある割り切りのある女である。

「おやすみなさい。如月閃」

「おう、おやすみ。明日は朝早いからな」

時計の秒針のリズムを聴きながら、俺は布団に潜って眠りについた。

咲桜マーメイド 完結編

早朝5時。

日は昇っているがどこか涼しさを感じる早朝に、俺は目を覚ました。隣では白崎咲桜がスヤスヤと寝ている。寝息を立てる彼女の横顔が、どこか幼さを感じた。

手っ取り早く身支度をして出かける準備を行う。(身支度と言っても荷物は着替えしかないので、顔を洗ったり歯を磨いたりなどの普段の日常とあまり変わらなかった)

布団を締まっている時に、白崎咲桜が目を覚ました。寝癖が全くついていないストレートの黒髪に色白の綺麗な素肌。まだ眠そうに目を擦っている。

「おはようさん」

「…………おはよう…ございます」

目をしょぼしょぼさせながら、丁寧な挨拶だった。それから一緒に布団を畳んで、彼女の身支度を済ませた後旅館からチェックアウトする。

これから行く目的地は一つ。

湖の近くの鍾乳洞にある御堂である。
湖へ向かう途中、白崎が尋ねてきた。

「竹宮という人は、一体何者なんだ？」

竹宮千代美子。駄菓子屋竹宮亭の主である。

その正体は…

「俺と同じ。…みたいなもんかな。まあ俺とあの人じゃレベルが全然違うけど。妖狐だよ、純正のな。」

竹宮千代美子。その正体は妖怪である。

純粹で純正の妖狐。

狐の妖怪といえば化け狐や九尾の狐を連想させるが、竹宮千代美子は、化け狐と九尾の狐を超越した九^く九^び尾である。

九尾の十倍。プラスもう九本の尾を持つ狐の妖怪。

彼女は九九の姿に化けることができる。

姿や形。人間にだって動物にだって、有機物ならどんな姿にだって完璧に化けることができる。と吹聴していた。

完璧に。

成りきる事が、為りきる事ができる。

驚くことに、一度化けたその姿の身体能力や特徴などを自分の意思で強化させ、高いステータスを作ることができる。

若い女性の姿に化けたのなら、モデル級の美女が出来上がる。老婆

の姿に化けたなら、屈強な体つきをしたプロレスラーのような老婆や、皺や身体も弱りきった見るからにご年配の老婆にだって化けることができる。

かれこれ1000年以上は生きているらしい。

聖徳太子にも会ったことがあるとかないとか。

かの有名な薩長同盟を結ばせた人物の根性を一から叩き直し、奮起させた影の功績を持っていると自慢していたこともある。
昔百鬼夜行にもいたとかなんとか。妖怪ぬらりひょんの孫とも、現在交友関係があるらしい。

「あの人が、妖怪…」

「そう。色々とその手の知識があるのはあの人自身が妖怪だからで、お前を助ける手を教えてくれたのは…多分、人手が欲しいんだと思う」

竹宮亭。現在アルバイト募集中。駄菓子屋なのに。

「等価交換…か。錬金術師…まさかお前」

「俺に鎧姿の弟はいない！」

白崎咲桜。意外とそっち系もわかるのだろうか。

外見からは到底想像できない。

ちなみに竹宮が扱うのは錬金術ではなく、どっちかといえば妖術だったり呪術だったり。

陰陽道や風水もかじっていると聞いたことがある。（陰陽道は、最近式神を操るロリ顔女子中学生陰陽師に危うく退魔されかけたりしたので、対策を練っているとのことだ）

「陰陽師って…実在するの？」

「そうらしいな。ほとんどは政治の世界にいるって聞いたぜ。実際見たわけじゃないから俺は半信半疑だけれども。あ、これやるよ」ズボンのポケットから一枚の紙を渡す。カルタの札のような和柄な紙で、表は真っ白な色をしている。

「これは？」

「この前竹宮亭に行った帰りにな。自分で使ってもいいしお前にあげてもいいって、すごい曖昧な言葉残して押し付けられたんだ。俺はもう一枚同じような紙もってるから。」

財布から同じ紙を見せる。その紙は真っ黒な色をしている。

「御守りかなんかだとおもってくれ」

そう言っただけ俺は彼女に白い札を渡した。

「お前封札師かなにか？」

「封札師でもないし秘法眼もありません！」

軽くツツコミを入れた後、白崎は制服の胸ポケットに札をしまった。

「……………ありがとう」

ボソボソと、微かに聞き取れる声で彼女はお礼をした。

当然、人間離れた俺の身体能力の聴覚はその微かな声も聞き逃す

ことはない。

「どういたしまして」

俺がそう言っと、彼女は俯いてそれから返事をしなかった。

「どうした？」

彼女の顔を覗こうとすると、パイとそっぱを向かれてしまった。

白崎咲桜。 気難しい性格なんだろうか…

いささか怒っているようにも見えなくもない。

「人に…：… もらったことなんて、初めて…：だから」

顔を見られたら困る。と吠えるような訴えだった。

無茶苦茶な言い草だ。

「時々お前のキャラが色々とおかしくなるが大丈夫か？」

ストレートに質問してみると、

「それは私がおかしいのではなくて作者がおかしい」とストレートに返された。キリッとした顔で、なんてメタな回答をする子なんだ…。

「そういえば」

今度は彼女から話題を振ってきた。

「文化祭は、どうしようか」

学業的な話だった。

そういえば俺と白崎はともに文化祭のことについて打ち合わせをしたことがない。

文化祭の実行委員に抜擢されのはゴールデンウィークを過ぎた後だし、そして彼女はゴールデンウィークを過ぎてから、呪われてしまった。

打ち合わせと言っても、クラスの出し物やクラスの予算や使用する教室などだ。

「今決めなきゃいけないのは、俺達のクラスの出し物かな。未だに決まってないの俺達だけだし」

「何にしようか」

「メイド喫茶とか」

「お前の趣味は聞いていないんだが」

「趣味じゃねえし！クラスの男共から聞いた願望だ！」

ちなみに俺が提案した輪投げは即却下された。

「まあ後は女子達の提案も聞いて帳尻を合わせるだけさ。まとまらなかつたら、俺達で決めようぜ」

「仮にメイド喫茶をやるとしたら、やるとしたらだぞ？男子達は何をするんだ？」

「むっ」

何を…するべきだろう…。

喫茶店なんだから…軽い食事。

「男共には裏方や料理をやってもらおうかと。女子には料理や飲み物の運びや接客だけで。これなら、男女平等に仕事の分配ができるぜ？」我ながらいいまとめ方だと思ったが、クラスのみんなに聞いてからだな。という白崎の一言で一蹴された。

文化祭の話も出来たし、今の白崎咲桜には至って何の変化もない。

「私は…」

急に彼女の声のトーンが低くなる。

「これを返したら…どうなってしまつのだろうか」

これ。というのは彼女が持つポーチの中身のことである。

「……………」

俺も彼女も、そこで口が止まった。

どうなってしまつのだろうか。

彼女が御堂に人魚の石を返したら、呪いは解けるのだろうか。

そんなに物事がうまく運ぶだろうか。

相手は、妖怪だ。

人外の存在。

人の常識なんてきつと通じないだろう。何事もなく穏便に事が終わるといいが、その時俺は。

一体何をしたら良いのだろう。

「すまない」

不意に、白崎が謝罪を立ててきた。

考えている最中だったので、俺は声も出せずにきょとした顔をさらけ出してしまった。

「色々と、迷惑をかけた」

「そんなこと今更すぎるって。とりあえず、今は呪いが解けたことを想定して、文化祭の予定でも考えようぜ」

取り繕うように、俺は笑って見せた。

その笑顔を見て、彼女はプイと横を向いてしまったが、まあ仕方ない。

それから俺は持てる知識を出きってクラスの出し物を提案し続け

た。

彼女も――白崎咲桜と一緒に提案を考えてくれた。

ほどよく歩いて、過ぎた時間は20分。
ついに俺達二人は湖に到着した。

「御堂つて、どの辺り？」

白崎は湖の岸边から森へ続く獣道あたりを指差した。
湖の周りには緑が覆って、早朝のお陰で湖の水平線あたりには少し霞がかかっている。湖から左に逸れて、林の中へ入っていくと、ジグザグした獣道が俺達二人の道を記してくれた。

青々と茂る林の中、先人達の残した道筋を辿っていくと「ここを右に」と、白崎が鍾乳洞への近道を指した。

林の中をくぐる際、俺は自分の自己紹介をすることにした。
今思えば、彼女には自分の名前ぐらいしか話したことはない。
場を和ます戯言、という訳だ。

「まあ今のところは、2つ年の離れた妹と二人暮らしかな。母さん

は俺がガキの頃に死んじまったし、父さんは海外で出稼ぎ中」

「私は…妹とおばあちゃんと三人暮らした。父も母も、もういない」

離婚。

二人の姉妹を抱えて、彼女の父と母は離婚したらしい。

その後は母親の祖母の下に預けられて、ここまで育ったことだ。

もういない。

その一言は、とても悲壮感漂うような、聞いていた俺も気分が落ちるような雰囲気だった。

彼女の両親が離婚したのは、彼女が小学校に上がってすぐのこと。

「お前も色々と大変だったんだな」

親がないということ。

父も母も消え、残ったのは自分と妹。

俺自身も母親はこの世にはいないけれど、家族思い（？）で俺と妹を食わせていくために身を挺して海外へと仕事の幅を増やしていく父親と、幼くして母親を亡くした中、母のこなしていた家事を率先して行う妹がいる。

大事な家族だ。俺はそれに支えられて生きている。

彼女には。白崎咲桜には、そんな人物がいるのだろうか。

「ついたぞ」

獣道から道をはずれて近道をした俺達二人の目の前には、

広く深い暗闇を纏った小さな洞穴が、周りは苔や伸びに伸びきった植物のツルがお互いに絡み合いながら洞窟のアーチを作っている。

鍾乳洞というよりは、洞穴だった。

遠い昔に人工的に作られたようで、入り口の側には苔むしたお地蔵様が奉られており、近くでは水の流れる音が聞こえる。

「雰囲気感じるな。いかにも何かいそうな」

ポリポリと頭を掻き、もう一度辺りを見回してみる。

特に何の気配も感じない。

妖気。みたいな。

なんちゃって半人狼の俺にでさえ、人以外の異様な雰囲気放つ気配は読み取れる。

ちらと隣の白崎を見てみると、表情はいつもと同じだったが、唇は

青く、首もとには微量ながらも汗が垂れていた。

「さて、行くか」彼女も頷いたことで、洞穴へと足を運ばせる。

お互いの携帯電話のペンライト機能を付け、真っ暗な洞穴の内部に明かりを二点灯火。

天井から水の滴る音。湿った空気。蝙蝠の騒ぐ音を感じ、先程までとは慎重に進んでいるため、もう何時間も洞穴に居座っているような錯覚に陥る。

「こんなに暗いからさ。なんか明るい話でもしようぜ」

「……………」

応答がない。まさかはぐれたりしたってことは。

携帯電話で足下を照らして見ると。

よかった。俺と同じく隣に彼女の足下も明かりに照らされている。

「話聞いてたか？」

不意に、携帯電話の灯りを彼女の顔を照らしてみる。

「ひぁ！」

どこの声帯から発せられたであろう、白崎咲桜らしからぬ可愛らしい驚きの悲鳴に俺も驚いた。

灯りを照らしたままなので、携帯電話を持っていない方の手で頭を覆うような格好に、若干腰が引けている。なんともしュールで滑稽な光景だった。

「照らすな！見るな！！」

赤面しながら叫ぶ白崎。普段からは見えない冷静さを無くした表情が面白い。

「……大丈夫？」

イタズラながら質問してみると、プイツとそっぽを向かれてしまった。

「少なくとも一回はここに入ったことのあるお方がねえ」

「怖いなんて言っていない！」

「怖がつてるなんて一言も言っていないぜ？」

「ううう…前に来たときは…こんなに暗くなかった」

言い訳がましく、加えて洞穴に悪態を付く白崎。

気分が乗ってきたことをいいことに、

俺は白崎と他愛のない会話に勤しみながら洞穴を進んで行った。

中でも彼女は中学時代に朱佐と同じクラスだったので普段からは見られない朱佐黄龍の過去の話（いわゆるカコバナ、ぶっちゃけると武勇伝だった）

一体どれ程歩いたのだろう、と思った矢先。

俺達二人は一寸先の闇の中に小さな光を見つけた。

「あそこだ。天井が崩れていて、一点だけ明るくなっている。」

彼女の声色が変わった。震えているようにも見える。

「そのすぐ側に、御堂がある」

一点の光を目指して進む二人。

白崎は強張っていてそこから先は喋ることはなかったし、俺も緊張してきた。

柔らかな朝日の光が見えるが、辺りは真っ暗な闇。

湿気も纏うことで、洞穴を吹き抜ける冷ややかな風も、何もかもが緊張させる。

「これが、御堂つてやつ？」

光に照らされて薄明かりの中、ようやく目的地へたどり着いた。
「そう」一言だけ呟いて、彼女はそこで硬直してしまっている。

薄明かりから映し出される景色は、中心に奉られている御堂と、壁画のように壁全体にびっしりと彫られている魚の鱗や様々な奇怪な文字の数々。

この御堂辺りは一つの部屋のような作り方になっているようで、俺達二人が通ってきた通路のような道の上には、岩で形作られた大きな鳥居が建てられている。

その両横には二対の人魚を模して作られた石像。

二対の人魚像に見ていた俺の後ろで、何かがもたれ掛かってくる重量が重なり、一瞬で振り向いて辺りを確認すると、白崎が崩れるように倒れていた。

「白崎！」

抱き抱える形で彼女の名を呼んでみるが、依然として彼女はぐったりとしていて目覚める様子はない。

おいおいおいおい。すっごくヤバくないかこの状況。

呪いの進行として見た方がよさそうだが、ここから先どうすればい

いのかなんて俺は知るよしもないし。

その時俺は尋常ではないほど焦っていた。

呪いの進行も然り、この闇一帯の中ただ独りという空間。

闇という不信や不安や恐怖。

白崎咲桜の、死。

ここで俺の意識は停止を迎える。

気が付けば後頭部に鈍痛が走っていた。
手足の感覚を探ると、足は自由に動く。

二の腕辺りにロープで縛られていて手は不自由だ。

やっと視界が慣れてきたようで、御堂の前には白崎が倒れているの

を目視できた。

そして俺は人魚像のところで手を縛られて拘束されていた。

「才………華………」

倒れている白崎が、口を開いた。

どうやら倒れているだけで、意識はあるようだ。

「そうだよ」

御堂近くの薄明かりから一人の人影。

「おねえちゃん」

一人の少女が、白崎咲桜を姉と呼ぶ。

「どうしてあたしがここにいいのか。って顔、してるよね」

「なんで………才華が………」

「わからないの？ 気付かないの？ おねえちゃん。ここまで来てわからないの？ 彼氏みたいな男なんか連れてわざわざこんなところまで来て旅行って話？」

嘲るように、罵る、嘲笑う少女。

彼女は白崎咲桜の妹のようだ。

俺の聞いた限り、白崎の語る妹の人物背景は皆無である。

姉を嘲笑う、妹。

「ま、これからおねえちゃんはこの世からバイバイするんだから。冥土の土産に教えてあげるよ」

けらけらと笑う妹。

動かない姉。否、彼女もまた俺とどうように縛られて拘束されていた。

手足の自由を失い、そこで不安と絶望を味わって。

「なんであたしがおねえちゃんにこんなことしたか御理解いただける？」

姉に近付いて、絶望に満ちた実姉をまじまじと見つめる白崎才華。

「あんたがあたしからお母さんとお父さんを奪ったからよ」

正確には引き離れた。が正しいかな。と憎々しげに才華は姉を見る。

「私……が……」

白崎咲桜の声は震えていた。

「お父さんがあんたの名前つけたんだってね。それであたしの名前はお母さんがつけた。お父さんは自慢の長女を溺愛し、溺愛の末……自ら長女に手を掛けた」

「やめろ!!」

猫なで声が響く中、咲桜が叫ぶ。

「それを見たお母さんは、あたしたち姉妹を自分の祖母の下へ逃がす形で引き取らせ、そして離婚。……あんたが悪いのよ。あんたがいなければ、お父さんがおかしくなることも、お母さん達が離婚することもないのに」

「それに気を使ってるのかもしれないけど、母親面したり、色々甘やかしたりすんの、うざったいんだけど。正直見てて目障りだし虫酸が走るの」

「才華……」

「家族を奪われた気持ちがある？奪ったあんたには到底わからないと思うけど、だから……昔家族四人で行ったこの湖で」

殺してあげようかな、なんて。

彼女は言い放った。

実の姉に。

家族に。

「恨んで…たのか…」
泣き声、に近い呟き。

「はあ？恨む？何言ってるのよ。そんなことじゃなくてー。あたしはー、優しい優しいおねーちゃんのことかー」

コツ。コツ。コツ。

ヒールの踵の音が響き渡る。

「死ぬ程だあああいつ嫌い。だったのよ」

うふ。

笑って、憎々しげに笑って、白崎才華は甲高い声で笑う。

勝ち誇るような笑いと実の姉を虫けら同然、それ以下の物を見るような冷たい目で下にひれ伏す姉を見つめる。

「呪いが進行してこの石を壊してしまえば、あんたはこの世からサヨナラバイバイ。よかったじゃんおねーちゃん、これで楽になれるよ」

ていうか早く死ねよ。気持ち悪い化け物。

ヒールで。

ひれ伏す咲桜を蹴り飛ばし、悦に浸って笑う才華。

姉の咲桜は嗚咽を吐くだけでもう何も喋らない。

しかし何度蹴飛ばされても、彼女はずっと妹を見つめていた。

「大体虫が良すぎるのよ。家族が離れ離れになったのに。にも関わらずあんたは平然とあたしに優しく振る舞った。なんでそんなことができるわけ？普通はできるわけないでしょ。あたしがお父さんとお母さんの事を覚えてるのに、話がしたいのに、会いたいのに、抱き締めてもらいたいのに。なのにあんたはそれを……わかっていたはずなのに、察していたのに平然と優しくした。」

くい、と咲桜の顎をヒールの爪先で持ち上げて彼女の苦痛に歪んだ顔を見よう。と才華は思った。

私が味わった寂しさを痛みで知らしめてやる。

腹部や体の至る部分を何度も蹴り飛ばした。これ以上無いくらいの絶望を味合わせてあげた。

姉妹であり家族でもある私の裏の、本音。

それを見せたはずなのに。

「何よ」

心が揺らぐ。

「何よ。その目。その顔」

見下していても、姉は、白崎咲桜は、私の方を見つめていた。

ずっと。揺らぐことなく、真っ直ぐ。

その芯のある瞳に、才華は揺れる。

「見ないでよ。化け物の癖に…」

一歩足を後退させる。しかし姉は視線を変えことなく妹を見続ける。

「見ないでって言ってるでしょおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおお
」

耳を裂くような叫びが巢窟内を反響し、才華が左手を振り上げる。

[illegible]

補足事項。

白崎咲桜は人魚。化け物であり、この俺如月閃。

俺も化け物だった。

白崎才華が振り上げた手に持っていたのは、姉である咲桜を呪った人魚の石だった。

白崎咲桜は何を考えていたかは分からないが、俺は人が死ぬのを見るのは嫌いだ。

伸縮自在の爪、両手の爪を伸ばし、指に力を入れる感覚で爪の硬さを最大限まで構築させる。

軽く指を動かすだけで体に巻き付いて自由を奪っていたチエーンと綱を裂き、なりふり構わず白崎才華に体当たりを打ち咬ました。

なんとも単調な考えだったが、彼女が叫び声を上げ錯乱している今こそが好機だと確信した。

体当たりの際、さりげなく人魚の石を才華から奪取し、その場に倒れている咲桜を抱き抱える。

全身に裂けた傷や切り傷などが目に見える彼女は、息をするのも辛そうであった。

顔には擦り傷、服は所々汚れや裂けた痕が多々見られる。

「大丈夫。じゃなさそうだな。」

「才華……」

妹の名を呟く咲桜。
目には涙。

「死んじやえ」

後方からぐったりと起き上がった白崎才華が、力の限り何かを投げた。

鋤物の碎け散る音。

反響する砕け散る音。

[illegible]

反響し、響く白崎才華の高笑いの声。

偉業を成し遂げた。

邪魔者を消した。

歡喜の高笑い。

俺が彼女から奪取したものは人魚の石ではなかった。

「うつ…」

突然咲桜の体から青白い霧が、光とも読み取れるそれは、彼女の体から離れて行き、その場をふわふわと漂い、一帯を霧で覆い尽くす。

「これで白崎咲桜はいなくなった！残ったのは私だけ！！お父さんもお母さんも帰って来てくれる！！！！そうしたら……………」

それから才華の声は途絶えた。

霧で視界が良くない状態で俺が見た光景は。

彼女が霧に包まれて、その霧がまるで人魚の形をしているようで、その人魚の形をした霧が彼女の肢体に巻き付き。

手の形をした霧で彼女の首を締め上げ。

口とも言える部分で彼女の頭を喰らう様に。

霧は彼女に溶け込んで行った。

全ての霧が才華に溶け込むように同化して行くと、辺りは以前と同じ薄明かりで湿った空気を帯びた状態になった。

広間には御堂。鳥井と二対の人魚像。

御堂の側では才華が地に倒れている。

「き…如月…」

抱き抱えている手から、うめき声のような声で咲桜が口を開いた。

「才華を…」

そこで咲桜は意識を失ってしまう。ぐったりと、ぐにやりと首を落として気絶してしまった。

まいったね。

ひとまず咲桜を抱き上げて、才華の側に近付いて見る。
薄明かりの中でも認識できる粉々に砕け散った人魚の石。

本来は御堂に、あるべき場所に返すはずだったのに。

人魚を象った霧も、人魚の呪いなのだろうか。

大の字になって倒れている才華を担ぎ上げ、俺は女性二人をおんぶする形で洞穴を出た。

咲桜マーメイド 後日談

俺は近くの小さな診療所に彼女達を預け、事の経緯を千代美子に電話で説明した。

彼女は自分の予想通り。「そうであろう」としか言わなかった。

それを予測して俺を同行させたらしい。

彼女を、白崎咲桜を守るといふのは呪いから守るのではなく、外敵から、彼女を守るといふ意味合いだった。

それでも俺は守ることができなかった。

守るべきだったのか、そんな疑問が洞穴の中で浮かんでいたのだった。

家族のいざこざに他人が関わっていいのだろうか。

過度な姉妹喧嘩。では済まなかったので最終的には手を出した俺だが。

あれは行き過ぎだ。

家族が家族を殺すことなんて、あつてはならない。

白崎才華は言っていた。

あんたがお父さんとお母さんを奪った。

今俺の隣のベッドには白崎咲桜が床に伏せている。
その隣のベッドでは妹の白崎才華が、同じ様に意識を失っている。

診療所なのに病室が一部屋あったのは意外だった。

医者や看護婦には適当に理由を作って医療を受けさせてもらい、俺は二人の容態を適当にでっち上げることに思慮を尽くした。

「結局呪い…解けたのかな」

思考を辿る度に思う事だった。

白崎咲桜の呪いの行方はどうなったのか。

外傷の治療を受け、絆創膏やガーゼが貼り付けてある咲桜の顔を見つめる。
すぐに意識は戻る。医者の言葉を思い出した時、彼女は目を覚ました。

「ここは…」

「近くの診療所。二人共倒れたから俺がここまで運んだ。んで、今お前が目を覚ました」

「……………」

外傷が痛むらしく、咲桜はやっとの事で起き上がる事ができた。

「妹さんはそっちで寝てるよ」

「……………」

妹のベッドを見つめる咲桜。

夢げな瞳。

虚ろな表情。

「どうしてこうなったのか。説明できるか？」

頷きこちらを見る咲桜。

表情は変わらない。虚ろで精気が感じられない。

「昔、お父さんに乱暴をされた。私がお父さんの言うことを聞かないから、お父さんは私を自分の思い通りにいく様にしていた。最初是我慢していた。無理矢理させられて、嫌なこともされた。」

話ずに連れて彼女の目には涙が落ちた。

過去の辛い経験など、進んで話したくないに決まっている。

「ある日私はお父さんに「やめて」と言った。それからお父さんは私に暴力を振るようになった。お母さんはそれを見て、私達姉妹を自分の母の元に預けた。多分、それがエスカレートしてしまえば才華の身も危なかったと思う」

震える声で彼女は、

「そして両親は離婚した」

身勝手な父親の、父親の暴力。

事の発端はそれ。

原因は、幼くして離れた両親への飢えた愛情。

しかし白崎才華は知っていた。

自分の姉が父親から受けた事を。

それを知っていて尚、彼女は両親を求めて。

行き着いた先は、

姉を殺す事だった。

「話してくれて、ありがとう」

俯く咲桜はもう喋ってはくれなかった。

それから2日間診療所で療養し、咲桜の怪我や傷は完治した。

俺もそれに付き合い、今回の件を逐一千代美子に報告した。

千代美子によると、多少呪いの効果は残るが命にも身体にも悪影響は無いらしい。

石が壊れたことによつて、その石に人魚の魂の破片を壊した人物が、

次に呪われてしまう。

つまり次の犠牲者は、白崎才華となった。

石を壊してしまったため、もう半永久的に呪いは解けないと千代美子は言っていた。

白崎咲桜よりも酷い、呪いになる。

それについては姉の咲桜も「仕方のないこと」と認識している。

一つ疑問が浮かぶのは、何故才華が石を砕いたのか。

確かに千代美子は石を御堂に返せば咲桜の呪いは解けると言った。

伝承通り。才華は言っていた。

その伝承とは何だったのだろうか。
才華は咲桜を殺そうとした。

呪い殺す形で。彼女は石を砕けば姉が死ぬと思い込んでいた。

しかしそれは思い通りには行かず、自分に跳ね返ってきた。

石を砕く。

魂を砕く行為は、生命を奪う行為。

千代美子はそう言っていた。

故に、その魂を自分の物にする。
その魂の「感情」「心情」「力」を取り込んでしまう。

彼女は自らの手で石を砕いた。

自らの手に触れて、石を壊した。

その行為によって白崎才華は人魚に取り込まれてしまう。

白崎咲桜の呪いが怪我と例えるならば、白崎才華は病にかかってしまった。

人魚に呪われる程度ではなく。

どつぷりと、人魚に飲み込まれた。

しかし、退院間際で奇っ怪な出来事が起きた。

白崎才華が目を覚ました。

俺が彼女を見た時、彼女は表情を失っていた。

目と、鼻と、口と、全てが機能していないような、死んだような素顔をしていた。

「才……………華？」

咲桜は窓辺を見ている妹に呼び掛け、才華はこちらに首を傾げる。

死んだような人間。

瞳はくすんだ黒色で、唇には色が無い。

微かに唇が動きを見せ、「あなたは、誰？」そう質問をした。

記憶が無くなっている。

それが呪いなのだろうか。

それでも咲桜は笑って見せて、「私は白崎咲桜。あなたの、お姉さんです」と、自己紹介をした。

お姉さん。

才華は表情を変える事無く「お姉さん」とオウム返しに呟く。

「わたしは、だあれ？」

彼女は自分自身を失っていた。

自分が誰なのか。

何をしているのか。

自分に関する記憶を全て失っていた。

ここから先は咲桜から聞いた話だが、洞穴の件から一週間経った現在、白崎才華は地元の市民病院で入院をしている。

精密検査の結果、やはり自分自身の記憶を失っているようだ。それに知能も少しばかり落ちているとか。

俺は咲桜と一緒に才華のいる病室へ見舞いにやって来た。

診療所で見たときと同じ、感情の無い表情。

「才華、今日は友達を連れて来たぞ」

花瓶の花を変える咲桜。

「あなたはだあれ？」

首を傾げる才華。

どうやら診療所で会った事は忘れられているようだ。

「如月閃。よろしくな、才華ちゃん」

「きさらぎ…せん…」

診療所の時と同じようにオウム返しに何度も呟く才華。

それから咲桜はリンゴを剥いて、三人で食べて、あまり会話をすること無く病室を後にした。

「また来るよ、才華」

帰り間に彼女は才華に手を振る。

「うん、バイバイおねえちゃん」

微かだが。ほんの一瞬だったが、彼女は笑った。

白崎才華は微かに微笑んで、弱々しく手を振った。

「日常生活を出来るほど回復はしていないが、時々…笑うようになった」

帰り道で、咲桜が口を開いた。

「呪い…ね」

人魚の呪い。ではなく、人魚の意思が才華を呪った。

才華は人魚の意思である石を砕き、人魚の意思に自分を奪われてしまった。

「色々…迷惑をかけた。すまない」

立ち止まって、咲桜は俺に頭を下げる。

いつも一本のポニーテールに纏めている髪が揺れ、深々と頭を下げているので地にポニーテールがつきそうだった。

「俺は何もしてないよ。付き添っただけ」

そう。見ていただけ。

呪い呪われた哀れな姉妹を、ただ見ていただけ。

オーディエンスである。

そうでやんす。俺は何もすることはなかった。

これは俺が手を出しても、意見をしても無駄。

何をして、何を選ぶのか、決めるのは白崎咲桜なのだ。

白崎咲桜の事情。

白崎咲桜の問題。

「あ、そうそう。文化祭の出し物。俺達のはメイド喫茶にしたから
っ」

「はああああ!?!」

「ちなみに白崎の仕事はメイド兼メイド長だから。女子群達の指揮
よろしくな♪先本喜んでたぜ?」

「勝手に決めるな!!!!!!」

怒号の白崎咲桜を相手に、俺はいつもと変わらぬひょうひょうとした態度で彼女と帰路に付いた。

俺が才華から奪取した偽の人魚の石は、小さなペンダントで、そのペンダントの中には白崎家四人が、幼い咲桜と才華が笑顔で写っていた写真が入っていた。

このペンダントを咲桜に、もしくは病室にいる才華に見せたらどうなるだろうか。

しかし俺はそんな野暮なこととはしない。

如月閃は傍観者である。

黄龍クラーケン

話をしよう。あれは、つい一分前。

朝のホームルームの時間前に、朱佐黄龍はやって来た。

朱佐黄龍。策士兼イケメン担当。

ストリートで艶のある黒髪に整った顔立ち。

スラリと高い背丈。加えて頭脳明晰。

これだけの説明で事足りてしまう朱佐黄龍は、俺の親友である。

付き合いは中学生の時にまで遡るが、簡単に言えば彼は俺にとって恩人である。

そして同じ高校、私立盟凰高校に入学。

俺と同じクラスメイトとなった。

白崎咲桜と朱佐は同じ中学出身で、（ちなみに俺は八雲と同じ中学出身）彼女から朱佐の中学生時代の武勇伝を聞いたことがあり、常に成績は学年トップだった。

にも関わらず授業には全く参加しない。教室にいて席についたとしても、授業中は寝ているだけだった。

それが上級生の目に止まり、放課後朱佐は悪目立ちしている（いわゆる不良）上級生にボッコボコにされたい。

しかも学校のグラウンドの真ん中で。

しかし次の日、次は朱佐が上級生をボッコボコにしていた。

しかも全校集会の真っ只中で。

中学生時代は実にやんちゃだった朱佐黄龍。

今となつてはそんなやんちやも落ち着いてすっかり丸くなったよう
だ。

俺自身、この如月閃にも中学生時代はあり、その線では俺もやんち
やをしていたと言え、していたのだらう。

誰しも自分の中学生時代は黒歴史である。

思春期反抗期真っ盛りであり、情緒不安定でもある。

難しい年頃なのだ。

色々と生意気を言つたり、俗に言う中二病というその手の人間には
不治の病になってしまう心の病に陥ってしまう。

どうせ誰も自分の事なんてわかつてはくれない。

きつと自分は何でもできる。

俺最強（笑）

多々人それぞれ中二病に発症して、いつの間にか大人になって行く

のだろう。

そんな事も忘れて、社会の荒波に飲まれて、揉まれる。

縦社会の歯車の一部として機能し、同化してしまう。

そんな大人にはなりたくない！

と思うことも中二病なのだろうか。
隣にいる親友に話かけてみる。

「八雲よお」

八雲の肩をトントンと叩き、八雲は携帯電話から目を外してこちらを向いてくれた。

「八雲が見た限りでいいんだけど、俺って中学時代どうだった？」

「最悪最低中二病末期患者。症候群と言ってもいいね。知ってる？
症候群って治る見込みのない病名のことを言うんだよ」

末期患者だったのか、如月閃は。

しかも治る見込みはないとのこと。不治の病なのも頷ける。

「じゃあ中二症候群って言えばいいじゃねえか」

「まず中二病は医学的な病名じゃないし、誰かそういつて広まったただだよ。その点じゃ中二症候群って言うより、中二シンドロームって言った方が年頃の子達には受けがいいかもね。」

「カッコイイからってわざわざ横文字に言い換えるな」

中二症候群も中二シンドロームも変に長いし言いにくい。
その点で中二病という名称になったのだろうか。

言いやすいしな。

「如月エターナル中二病シンドローム閃」

「長ったらしいミドルネームをつけるな。鳶町中二雲」

「おやおや中に雲を六つばかり忘れていますよ?」

両者含み笑い。

実につまらなくて、しかし二人だけの間で通じるコントである。

「よっ」

朱佐が話に加わった。元々俺達三人共座席が近いので、久しぶりに八雲と二人で昔と変わらぬ漫才紛いの漫談をした。

いつもは俺達男臭い野郎共三人の中に、

「おっはようー!」

弾けるような笑顔と挨拶で、先本小羽がやって来た。
その隣には彼女の友達の白崎咲桜の姿もある。

「また閃君が面白い話してたの?」

「なんで俺限定なんだよ」

「いやあ、てへへ。だって閃君面白いし」

如月閃「面白い。」

実に失礼である。

先本小羽は俺と出身中学は一緒だが、同じクラスメイトになったことは無い。

よってこの高校一年生のクラスで初めて顔を合わせる事になった。
いや、実は彼女の方は俺の事を少なからず知っていたそうだ。

「まあ歩くネタ人間である閃が面白くなかったら生きてる意味がないよね。もう生きてること事態がネタ、それがギャグみたいな。」
辛辣な八雲の毒舌。これは俺だから通用するような話だぞ。

「はいはい生まれてきてすいませんでしたね。」

しかしそんなことには慣れっこなので、流す流す。

「そう言えば文化祭。あれって結局僕達のクラスの出し物は何するの？」

八雲が俺と白崎に質問する。

まだクラスメイトには、メイド喫茶について話してはいない。先本は別だが。（先本は料理も上手いし裁縫もできる奴なので、早めに協力を依頼したからなのだ）

「ああ。メイド喫茶だぜ」

先本以外の全員が驚いた。

ちなみに白崎は顔を真っ赤にして恥ずかしそうに顔を両手で隠した。
「ついでに言うと、八雲は女子に混ざってメイドコスプレで接客。
朱佐はウケが良いから執事服で接客。女子生徒は大体がメイド。男子は紅茶作りや軽食作り。裏方って奴よ」

「何で僕がメイドなんだよ！拒否権を行使する！」

「んじゃ黙秘権を行使。お前の顔なら大丈夫だろ。上手く化粧した

ら化けるんじゃない？化粧だけに」

「上手くもないし化けないし面白くない！」

「なんで俺が執事なんだ…メイド喫茶の意味が…」

「いやあ、そこは男女平等に。ほら、文化祭なんて楽しんで楽しませてナンボだから」

攻め寄る二人の男共を一蹴して優越感に浸る俺。
いつもの仕返し。と言う訳で、実に気分が良い。

「私も咲ちゃんのメイド姿を見るのが楽しみだなあ。きっと可愛いし。頑張って良い衣装作るからね！咲ちゃん！」

うつとりとしながら、時に熱を込め情熱的に語りながら先本は白崎に詰め寄る。（とっても迷惑そうでありながら恥ずかしそうに赤面している白崎）

いつも通りの変わらない日常。

俺はそれが何より嬉しかった。

白崎も無事に学校に復帰しているし、先本との関係も前と同じように良好だ。

さて、朝のホームルームが始まるチャイムが鳴り始めた。

とりあえず、この漫談は放課の時間まで持ち越しとしよう。

黄龍クラーケン 二本目

俺の親友、朱佐黄龍がこんなことを言っていた。

「いつまでも大人に成れない人間は、どうなるんだろうな。いや、どんな人間になってしまふのだろう」

それまるで特定の人物を指すような口振りで、どこか邪険にするような、哀れな者を見るような発言であった。

俺は大して考えること無く、そんなのはいつまで経っても子供さ。図体ばかりでかく（缶コーヒーを片手に話す朱佐の姿は、とても様になっている）

「そうだな。そんなものは人間とは言わない。俺は、そんな風にはなりたくないな。生きている心地と、生きている意味が見当たらない。人間は成長する生き物だ。体も…心も、な。今のこんな平和な世の中で、誰が気付くだろうな」

「何を気付くって？」

朱佐は鼻で笑って、風になびく自分の髪を掻き上げながら…

「人間の成長に限界なんてない、という事さ」

朱佐は笑う。何を思つて笑うのかはわからなかった、しかし彼には彼なりの思想があるのだろつ。と、俺は素直にそれを受け止めた。成長、ね。

「そろそろ授業が始まるな。戻ろつ」

もたれるフェンスからびよんと跳ね返り、朱佐は屋上から出る。

「後で飲んどけよ」

そう言つて、彼は俺に缶コーヒーを投げ渡した。

飲んでなかったのかよ。

午後6時過ぎ。その時間まで俺は八雲と朱佐と共に学校から近いショッピングモールで時間を潰して暇を弄んでいた。

途中で先本と白崎のコンビと出会い、暫くは五人でショッピングモールを見て回つたが、5時あたりになつて白崎が「バイトがある」と言つて先に別れて、後に帰り道が一緒の八雲と先本は、八雲が送つて行く形で共に帰つて行つた。

そして今は俺も朱佐と別れて帰宅の最中。
夏が近付くに連れて陽が昇る時間も長くなり、冬に比べると断然今の方が明るい。

道中で通った一軒の駄菓子屋。

竹宮亭である。

その古風な店の外装は、今の近代的な建物より一層古臭く感じるが、個人的にはこんな古風な造りは好きだった。

時代に取り残されるのではなく、何時までもそこに居座り続けるよ
うな。

もしかして俺が生まれる前からこの竹宮亭はあるのではないのか。

そんな小さな疑問を抱いて紙パックの自動販売機の横に自転車を停
めて竹宮亭に入店。

「お帰りなさいませ！御主人様！！」

なんとも滑稽だった。

と言っか、引いた。

無意識の内に自分の左足が反射的に一步引いていた。

そこには黒のストッキングにメイドエプロン、メイドカチューシャやその他諸々を着飾った白崎咲桜が溢れんばかりの笑顔でもてなしてくれた。

「今は晩御飯の御時間ですね。ご飯になされます？ライスになされます？それとも、お・こ・め？」

「どっちも同じじゃねえか!!」

「では、特製オムご飯を」

「オムライス、な」

「いやん、あたしっいたらまた間違えちゃったゝてへっ」

「萌え萌え〜キュ…ってやるか!!」

白崎咲桜が白崎咲桜ではなかった。

今の掛け合いでも御理解頂けるだろう。

失礼かもしれないが、彼女は自ら進んで地雷を踏みに行くような真似はしない。

そもそもメイド服姿なんてものを堂々と見せるようには思えない。

恥ずかしがり屋さんらしいし（先本小羽談）

「なんじゃ、つまらんのう」

彼女はその場でくるっと横に一回転すると、次に目を合わせた時は見事な朱色と橙色の着物を着こなした和服美人が現れた。

髪も黒色から明るい茶色に変化していて、後ろはお団子にして簪が数多く突き刺さっている。

金色の瞳のこの人物こそ、この駄菓子屋竹宮亭の主、妖怪くまひ九十九尾の竹宮千代美子である。

「せーっかくサービスしてやったのに、無駄に勘の働く奴じゃのう。つまらんつまらん」

むくれっ面を見せる千代美子。

姿形は二十代の顔立ちをしているが、かれこれ彼女は1000年生きているんだとか。

年を欺く妖怪である。

「っっ痛え」

「余計な事は語らんで良い」

殴られた。しかもグーパンで。
頭上にメテオでも落ちてきたようだ。

「とりあえず何か買ってゆけ」

小さな買い物バスケットを無理矢理俺に押し付けて、店にところ狭しとズラリと並べられている駄菓子コーナーへと案内された。「あと、これとこれ。そっちも捨てがたいのう。おお、これは先日入荷したヨーグルじゃ、懐かしいじゃろう？ほれ、買ってけ買ってけ。若い頃の苦勞は買ってでもしろと言っじゃろう？」

一つ間違った表現が含まれているが、気にすることもなく千代美子は俺のバスケット（小）に駄菓子をゴミ箱のようにぽいぽい入れていく。

飴玉や10円ガム、のしイカに駄菓子、スナック菓子や一口スルメなどを大量に買わされた挙げ句。

合計1210円なり。

「こんなに買うか！！！」

バスケットの半分以上を元の場所に戻し、残ったのは飴玉四種類と

袋詰めにした駄菓子。

合計210円なり。危うくその場のノリで、ついucciかり、あろうことか何の予定もなしに一人では大抵処理できそうになさそうな大量な駄菓子達を買わされそうになった。

竹宮千代美子。あんたはその辺のキャッチセールスよりも危ない奴だ。

「ふん。せつかく儂のベストセクションを特別に提供してやろうと思っていたのに。早よう勘定をすませろ」

勝手に提供しておいてからの逆ギレだった。

無茶苦茶すぎる。

古臭いレジの前までバスケットを持っていくと、そこには先程垣間見たようなメイド服のクラスメイトが立っていた。

「い…いらっしやいませ」

このクラスメイト、リンゴよりも顔が真っ赤である。

艶のある黒髪に後ろはポニーテールで纏めていて、前髪から後ろにかけての中間にメイドカチューシャを付け、襟や袖口やエプロンの至るところにフリフリの飾り、白と黒の二色を着こなすクラスメイ

トは、白崎咲桜だった。

一体何のバイトなんだろうか。

千代美子の世話係、雑用、もしかして奴隷？

首にチョーカー付けてるしな。

「そんなに見るな」

顔を赤らめながら素っ気ない態度の白崎。

不馴れな手つきで駄菓子の数と金額を計算している。

「俺客なんですけど」

「……………」

無視された。

レジでの計算に手間取っていて俺との会話は二の次の白崎。
レジからお釣りがなくてあたふたしている。

赤面している姿がとても似合っておらず、俗に言う「ドジっ娘メイド」のカテゴリーに分類されるのではないかと思う程だ。

「ここをさ、こうやって」

レジが置かれている木製の棚を蹴っ飛ばす俺。
するとレジの口が開いた。

「おお」

驚いて声を上げる彼女。心底驚いているようだ。

「色々とコツがあるってこと。俺もここでバイトしてるから。」

わかんないこととかあったら言ってくれ。と言い放った後、再び頭上に衝撃が走った。

そのの主は千代美子。目視している限りでは、その細腕のどこから怪力が発揮されるのだろうか。

「壊すな、いつも言っておるじゃろうが」

「元々壊れてんだろっが！それに、毎回毎回殴られたら俺の頭がぶっ壊れるわ！」

店長とアルバイト社員という関係とは言い難い口論だった。

と言っか軽い口喧嘩だった。

これも日常の内。

少し変化があるとすれば、俺と千代美子が言い争っている様子をあたふたしながら見守っている白崎がそこにいるということだった。

竹宮亭で一悶着終えた後。

事のついでという訳で、俺は白崎咲桜を家まで送り届ける羽目になった。

レジを壊した事を許してやる。千代美子の気まぐれで命令された事だった。

事のついでって…俺の自宅と白崎の家って反対方向なんだけれども。

「お前もあそこでバイトしてたのか」

隣で歩く白崎に問い掛ける。

今の彼女は竹宮亭にいた時のメイド服ではなく学校の制服だった。

しかしどうだろう。個人的主観だが、暫く見ている内に彼女のメイド服姿に慣れたのだろうかと思えば、かなり似合っていた部類に入る。

スタイルも良いわけだし、後はもうちょっと笑顔を見せてくれたら。
「痛っ!?!」

急に足元に激痛が、踏みつけられたかの如く。

「何しやる!」

犯人は勿論白崎咲桜だった。

俺の足をローファーで踏みつけて尚、その表情は変わらない。

「急にニヤニヤしていたから、悪い病気にでもかかったのかと」

「してねえよ!むしろその病気の原因はさっきのお前のメイド服姿だ!」

「変態」

むづ。自ら墓穴を掘ってしまった。

「あれは…文化祭の練習というか…うるさい！」

妙にもじもじしながら、それでいて恥ずかしがりながら、最後はうるさいの一言で片付けられてしまった。（俺何も言っていないのに…）

それから彼女はぶいっとな横を向いてこちらの弁解（というか言い訳）を聞いてくれなかった。

彼女の住む地域は、俺の住む所よりも道路の舗装や区画整理が盛んに行われていて真新しい綺麗な道路やガードレールや歩道があり、白崎も「ついこの間までは工事がうるさかった」などと嘆いていた。

住みやすくなっていく町。

それはそれで良いことなのだと思う。バリアフリー化もあり、町が綺麗になることも悪いことではない。

八雲の住む町（俺の家から隣町）は急速に都市化をしていて、今では駅の近くに何件もの高層ビルや高層マンションなんかもできていて、結構人通りが多くなっているらしい。

「じゃあ、私は…」

気がつけば白崎家に到着していた。何の脈絡もない他愛のない話をしている内に到着してしまった。俺は何かを忘れている気がする。

「ん。じゃあ気をつけてな。」

「家が目の前で何故気を付ける必要がある」

むう。またもや揚げ足。

彼女と話すとよくツッコミを入れられてしまう。

決して狙っている訳ではないのだが。

「例えばお前がすぐその玄関前で転んだり」

反撃を試みる俺。

しかし彼女はそんなことを耳に入れず、「それじゃあまた明日」と心無い挨拶を済ませて帰宅してしまった。

時計を見ると午後8時。

よく考えてみるとあの店、竹宮亭は何故駄菓子屋なのに夜まで営業しているのだろうか。

しかし俺の思い描く駄菓子屋の想像は日中だけ営業。つまり日のあ

る時間にしか営業していないという個人的な偏見に辿り着くのである。

なので夜遅くまで営業している竹宮亭を、俺は駄菓子屋というカテゴリーに入れずにいる。

夜まで営業している駄菓子屋。

普通だろうか。

まあ、この御時世は色々と手を加えなければ営業も難しいのではないかと考える。

コンビニエンスストアもしくはスーパーマーケットも、はたまたデパートやショッピングモールも多種多様に様々な工夫を盛り込んで営業成績と売上を伸ばしている。

大人になるというのは難しそうだ。

成長。

生きる意味。

朱佐の言葉が思い浮かぶ。

策士兼イケメン担当の朱佐黄龍。

どちらにも皮肉が混ざっているがどちらも彼には合っている。

頭脳明晰。

成績優秀。

容姿端麗。

これだけあれば彼の説明には事足りるのだった。

朱佐の事を思い出している内に俺は自宅に着いた。

なんの変鉄もない二階建ての一軒家。

それが如月家である。

「ただいまー」

玄関から数メートル先にあるリビングには明かりがついていて、仄

かに香る良い匂い。

きつと妹の彩が晩飯を作っておいてくれたのだろう。

「ただいまーっと」

リビングのドアを開けて再び帰宅の挨拶。

「にーちゃん遅い」

「邪魔してるぞー」

「お帰りなさい閃」

彩の他に客人が二人、一方はソファで寝転がりながらテレビのバラエティ番組を見ながら笑い混じりにこちらを見る女性、真姫那巫女さんと、テーブルで書き物に勤しみながらもゆったりとした落ち着いた声で俺の帰りを唱える女性、末永えいこ（すえなが えいこ）さんが出迎えてくれた。

「えいこさんとはかく、なんで那巫女さんまでいるんですか」

椅子に腰掛けてそのままカバンをソファに放り投げる俺。

えいこさんは彩の家庭教師としてよく我が家に来てもらっているし、家の裏のアパートに住んでいるので近所付き合いも長い方だ。

「いーじゃんいーじゃんそんなに邪険にあしらわなくてもさあゝ。あたしあそのともかくのえいこさんに連れて来られた訳だから、正しくはえいこさんも那巫女様ともかく。だね」

ソファの背もたれから、ぐいと顔を出してけらけら笑う那巫女さん。

美人なのだが、その特徴的なしゃべり方と生活態度でせつかくの美人が台無しだった。

髪は真っ直ぐストレートで、明るい茶色とも言えるブラウンと金髪と赤色混じりのお洒落な髪色。

生まれつきと言っていた透き通った少し茶色掛かった瞳はまるで猫の目のようだ。

くすんだ黒色のツナギを着こなしていて、上半身からは白のチューブトップをちらつかせている。

自称カッコいいおねーさまなのだが、俺から言わせればただのだらしない年上の女性だ。

俗に言う残念美人。

残念という言葉に畳み掛けるが如く、彼女はソファの背もたれを倒してソファからベッドの形態に変形させると、そこに横向きに寝転がって足は親父よろしく器用にあぐらを掻いている。

楽な体勢になったようで、再びテレビを見ながらゲラゲラ笑う那巫女さん。

いや、中年のオヤジでもそんな格好はしないだろう。

「すまん、閃」

テーブルの反対側の席のえいこさんが軽く謝ったようだ。

視線を那巫女さんからえいこさんに切り替え、えいこさんの話を聞く。

「私も彩も料理が出来ないから、那巫女を呼んだ訳なんだが」

それも予測済みだった。

腰まである長い栗色の髪をローポニーで纏めているえいこさん。

彼女は料理が苦手だった。

個人的な偏見を挙げると、どう見ても料理是那巫女さんよりえいこさんの方が得意そうな気がする。

いつも落ち着いていて冷静沈着。今日は薄手の紺色のカーディガンで、中は薄いピンク色で丸襟のYシャツを着ている。下は黒のレギンスで、明るくもなく暗くもなく、落ち着いた色合いの服装だ。

今は黒淵のメガネをかけていて、一層インテリジェンスな雰囲気がある。

冷静沈着な末永えいこさんと残念美人の真姫那巫女さん。

「まあ、いいつすよ。別に」

はあ。と一息ついてお茶を汲む。

「今日はブロッコリーとアスパラのオレッキエツテとグリッシーニとコーンスープ風ババロアのサラダ添えとパンナコッタだよ〜ん」

全部冷蔵庫に入ってるから。料理の説明を終えた那巫女さんはまたテレビを見始めた。

那巫女さんは近くの駅前のホテルで働いている。
サービスマン、というかサービスウーマンなんだろうか。

あたしにできないことはない。と吹聴していて、フロントの仕事でもキッチンでの仕事も難なくこなしているらしい。

らしい。というのはえいこさん情報なので、俺がこの目で見た訳ではない。

しかし料理は素晴らしく、悔しいほどに美味しい。

上手いし美味しいのだ。

多分グリッシーニというのは、テーブルの真ん中に位置されているシャンパンガラスの中にある小麦色の棒だ。大きなプリッツにも見える。

時々それをポリポリ食べながら書き物をしているえいこさんがいっ
になく可愛らしかった。

「いや、これは失礼した。行儀が悪かったな」

苦笑いを浮かべて照れ臭そうに食べかけのグリッシーニを小皿に置
くえいこさん。

きつと行儀が悪いのは那巫女さんが原因だと俺は勝手に解釈した。

「はい、にーちゃん」

俺の目の前には色鮮やか、というか少し緑が多めの豪華なイタリア
料理が出てきた。

先程の那巫女さんの言葉で彩が冷蔵庫から出してきてくれたようだ。

「さあゝって、食べますか」

「は！？まだ食ってなかったのかよ！！」

思わず那巫女さんへタメ口になってしまった俺。

時刻は9時過ぎ。晩飯にしては遅い。

「彩ちゃんえーこがうるさくってさああ。皆で晩御飯が食べたいんだとさ」

ソファからやっと動いた那巫女さんが台所へ回って食事の準備をする。

「帰りが遅くなってごめんなさい」

もう三人は食事を終わらせているのかと思っていた。

夕方から家庭教師で彩を見てもらっているえいこさんがつまみ食いをしてしまうのも頷けた。

「謝ればいいさ。彩、コップはどこだったかな」

「棚の左上にありますよー」

時々見える変わった日常。

彼女達との付き合いはかなり長い方だし、お世話になりっぱなしな

ので、俺は感謝してもし足りない状況だった。

えいこさんは彩の母親代わりになってくれているし（料理はからっきしダメだが）

那巫女さんは彩のお姉さんみたいなポジションだった。（しかし料理は上手い）

はあ。ともう一息ついて、俺は晩御飯の準備をする三人を手伝うことにした。

カバンの中で震える携帯電話に俺は全く気付かず、着信は二件あり。

朱佐黄龍と鳶町八雲だった。

黄龍クラーケン 三本目

如月閃が携帯電話の着信に気付いた時は、それはもう着信履歴という部類に入り、深夜にそれに気付いた俺はもう彼等は就寝していると勝手な自己解釈を済ませたので、何の心配もせずに自分もベッドに向かって行ってしまったのだ。

現在は学校の教室。

朝のホームルーム前なので教室は騒がしい。

勿論この俺も教室の中では騒がしい人間の部類に入る。

賑やかなのが好きな点もあるし、何より友達と合法的に会える事や話ができる事が俺の学校へ行く理由ともいえる。

学校は人間のコミュニケーション能力を形成するための場所だと思う。

後は人間が集団で行動するにおいての協調性や団結力やその他もろもろを育てる場所。

「おっはよー閃君！」

頼杖を突きながらぼけーっとしている俺の背後から、いつもの二人組が現れた。

先本小羽と白崎咲桜。

先程の声の主は先本で、満面の笑みで朝の挨拶をしてくれた。一方、その隣にいる白崎は軽く首で会釈するだけだった。

「今日朱佐君お休みだつてね」

「え、そうなの？」

「うん。さっき先生が言ってたの。わたし今日日直だから、クラス日誌に欠席した人とか記入しなくちゃいけないくて」

大変そうだな、日直。俺はそう言い残して、「何か手伝う事あるか？」と提案してみる。

「えへへ。気持ちはありがとうだけど今日はもう助太刀の先客がいるのだ」

ぎゅっ、と隣の白崎に抱き付く先本。まんざら嫌そうでもなく顔を

赤らめて照れる白崎。

ああ、なるほど。

仲の良いカップルだ。

カップルというよりは、百合ップル？

朱佐が欠席か。

珍しいな。

夏場に風邪。その点は珍しくもない時々遭遇する日常だ。

昼休みに電話でもいれとか。昨日電話取れなかった詫びもしたいし。

そう思つて俺は朝から隣の机に突っ伏せている八雲を一目見て、同様に俺も朝から一時間目の授業を睡眠学習に切り替えたのだった。

「お掛けになった電話は、電波が届かない場所にいるか、電源が入っておりません。お掛けになつて」

午後昼休み。

授業終了の鐘が鳴り終わると同時に朱佐に電話をした俺。

しかし携帯電話の受話器からは機械的な留守番電話サービスの声を迎えて俺は電源ボタンを押して通話を切る。

「朱佐、出なかった？」

心配そうな表情の八雲。話を聞けば、八雲も朱佐から電話が掛かってきていたようで、俺にも何か連絡が行っていないか。という理由で俺に電話をしたのだ。

「通じねえわ、電話」

ボタン、と携帯電話を折り畳んでポケットにしまう俺。最新機種
の折り畳み式の携帯電話は、側面にあるボタンを押すと自動で開いて
くれるが、折り畳む時は手動というよく理解できない便利性があつ
た。(それならどっちも手動が自動にしておけよ、というのが俺の
本音)

「僕が電話を掛け直した時にも…留守番だった」

「ただの風邪だろ？それに昨日から充電切れてそのまま放置しち
まってるだけだよ、あいつは」

いや、朱佐黄龍はそんなずぼらな性格ではない。

朱佐黄龍は慎重な男だ。

慎重で、冷静で、それでいて頭脳明晰。

一度俺達二人に電話を入れてきたのなら、俺達が必ず折り返し電話
を入れるぐらい彼なら考えずともわかることだ。

何故彼の携帯電話に通じないのか。

彼の欠席の理由。

風邪で欠席。風邪であることさえ本当のことなのかわからなくなってきたしまった。

「風邪…ね」

いや、俺は聞いたじゃないか。

朱佐くんは風邪だ、って。

先本小羽から、その先本小羽は…

先生から聞いた。

「先生に、学校に欠席の連絡をしたって言うのなら」

「え？」

八雲はきょとした表情で俺が何を言っているのか理解できていなかった。

「朱佐はお前が心配するほどじゃねえよ」

八雲にそう言い聞かせて俺はカバンの中から弁当を取り出す。

「放課後は朱佐の家にも行くか」

今日の弁当箱はかなり大きく、形は正方形で、紫色の風呂敷に包まれていた。

那巫女さんが作ったのだろうか。

箱を包む風呂敷を解いていくと、そこには二段の黒い箱に白い燕の絵が彫られた、言わばお重箱が現れた。

「なんだか今日はすごいね」

「まあな」

那巫女さんが作ってくれたんだよ。と付け加えて、重箱の蓋を開けるとそこには重箱の外装には似合わない料理が数々とところ狭しに揃えられていた。

二段目の重箱には昨日御馳走になったイタリア料理の残り物と、一段目には色鮮やかな中華料理が顔を見せる。

エビチリや麻婆茄子やシウマイ、春巻等がまるで一つの芸術品のような飾り付けで俺を圧倒させる。

豪華過ぎる昼食だ。

「閃君のお弁当すっごいね」

そこに先本小羽と白崎咲桜がやって来る。

二人共自分の弁当を持ちながら、おまけに利き手には箸を持ってる。

お前ら行儀悪すぎ。

「知り合いが作ってくれたんだよ。よかったらいくつか食べてってもいいぞ」

いただきます。と箸を取り出して、俺は手始めに一段目の中華料理から攻略していくことにした。

当然俺一人の手では（この場合では胃袋だが）重箱弁当の攻略は不可能だったので、先本・白崎・八雲の三人に重箱の中身を半分以上食べてもらった。

ポリウムありすぎですよ那巫女さん。

いくら高校生が食べ盛り真っ盛りの年頃とは言えども、これは多すぎる。

食欲と満腹感が満たされたところで、俺は昼からの授業を二時間ぶっ通しで睡眠学習を行う形で、机に突っ伏せて寝たのだ。

昨日の那巫女さんの無駄話と、えいこさんの雑談が再び夢に出てきた。

人の態度や表情などお構い無しに自分の話を独特な口調で話す真姫那巫女さん。

かたや人の態度や表情を汲み取り、理解しようとしながら穏やかな口調で話す末永えいこさん。

対極的な二人だが、二人特別仲がよかった。

以前俺が二人に対して仲が良いんですね。と言ったところ、あったり前なのよん。ただの一言の仲が良いんですね、なあゝんて言葉一つじゃ語り尽くせないような表現出来ない仲なのさ。んな？えーこそ？那巫女さんはえいこさんの背中にもたれ掛かるように、えいこさんの肢体に自分の手足を絡める。

それは言葉の通り彼女は長い手足を、植物のツタが他の木々に絡むと同様に二の腕から指先までがツタの如くえいこさんに絡み付いている。

まあ、長い付き合いだから。言葉通り仲が良いのではないのかな？それにしても那巫女。私と那巫女は大学院からの付き合いではないか？時間で計れば二年という付き合いになるが、そんな時間ごとくに私は囚われない、と言っただろうな。お前は。

那巫女さんの絡みに抵抗することなく言葉を続ける。

うんうん。なつかみの濃い二年間を共に学舎で学び、共に苦境を乗り越えて英知を分かち合って友情を交わしあったわよね。

軽々しく語る那巫女さん。

なんであんたはえいこさんの耳元で囁くように言っただ。

仲が良いのは良いことだ。

しかしこの二人は何かしら危ない、危険な大人の香りが漂うのは何故なんだろう。

そもそもなんで俺は昨日の出来事が夢に出てきているのだろう。

程よく熟睡して（座ったまま寝ていたので体の節々が少し痛い）俺はホームルームを寝惚けながら迎えた。

「やっと起きたんだね、閃。疲れが溜まってるのか僕は知らないけど、珍しいね、二時間も閃が授業を寝て過ごすなんて。っていうか完全に熟睡の域だったよ。数学の葛西先生なんて「ほっとけ」だった。」

「んあ、数学も寝ちまったか。今もうホームルーム？」

八雲は首を縦に振る。

もう授業は終わって、ざわつく教室ではホームルームの真っ只中である。

「寝過ぎしたな。こりゃ」

頭をぼりぼりと掻き、くああ、と欠伸をかいて教室の辺りを見回して、自分に注目が集まっていなことを確認する。

起立。

礼。さようなら。

ホームルームという学業の一日の締めくくりを一通りの作業と称して、俺は鞆を持って教室を後にする。

「行こっか、朱佐の家」

八雲が後についてきて、その後ろには先本小羽と白崎咲桜の姿がある。

「あつ！閃君見ーつけ！」

帰り時だというのにも関わらず、朝といい昼といい、依然としてデ
ンションがハイな先本。

笑顔が太陽の様に眩しい。

サンシャインな感じだ。決して砂になれる悪行超人ではないが。

「これからどつか行くの？私は咲ちゃんとふらふらするんだけど、
一緒にしない？閃君が一緒なら八雲君も一緒だよね！」

「ん。わりいな。今日は朱佐ん家行くんだ。」

俺は申し訳なさそうに謝る仕草を見せるが、ふらふらってなんだ、
ふらふらって。

脳裏に先本と白崎で途方もなく体をふらつかせているビジョンが頭
を過ったが、実に滑稽である。

「朱佐君の家に行くの？私一回も行ったことないから、一緒に付い
て行ってもいい？ああ、でも朱佐君に連絡してないからだめかなあ
…。今日一度も朱佐君の顔見てないから、私心配だなあ」

一瞬、ほんの一瞬だが、先本の後ろにいる白崎咲桜の顔が、先本の「朱佐」というフレーズを聞いて、ほんの僅かに歪んだのを俺は見逃さなかった。

彼女は朱佐と同じ中学校出身で、クラスも同じだそうだ。

その当時、言うなれば若気の至り真っ盛りの朱佐黄龍を見た白崎咲桜はそれに幻滅し、それで降彼を快く思っていない。

現在はかなり、何処かで頭をぶつけて正常に脳が機能しているような優等生に変わったらしい。（白崎談）

「まあ俺達もアポ無しだから、行こうぜ。人数が増えても減っても、大差ないからな」

そう言った矢先に刺さって来た鋭い視線。眉間に皺を寄せた白崎がこちらを見つめる。

見つめると言っても、刺すような鋭い視線を見せたのは一瞬であつて、その後はいつも通りの鉄面皮のような表情の無い顔でこちらを見ていた。

こうして俺達四人は下校途中で朱佐黄龍の家に行くことになった。

下駄箱で八雲が、ふと思い出した様に「あ、閃」と。

「ん？」一言だけ返事をして、靴を履くことに躍起になる俺。

「睡眠学習に興じた如月は夏休みの宿題を二倍にするって葛西先生が言ってたよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5095k/>

如月妖怪記 第一幕

2010年12月6日18時44分発行